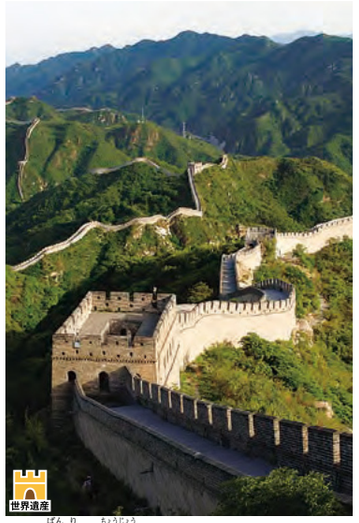
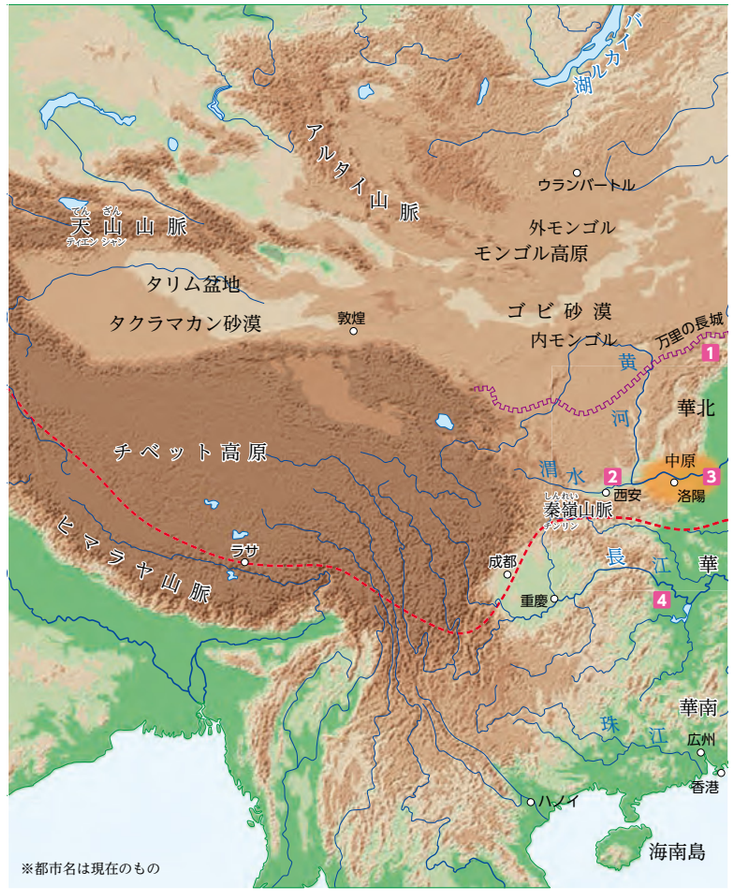
1節 東アジアの文明―中国の文化と諸民族の交流



▲1 **万里の長城**　漢族が建てた中国の王朝は，北方民族などの侵入を防ぐため，長城を築いた。写真は明代の長城。



東アジアは，中国および朝鮮半島，日本列島，インドシナ半島北部を含む地域である。中国の黄河流域の**華北**は乾燥気候で，畑作が中心である。一方，長江流域の**華中**やそれ以南の**華南**は温暖湿潤気候で，稲作が発達し，３世紀に漢族が華北より移住しはじめると，穀倉地帯として徐々に発達していき，広大な中国の経済を支えるようになった。稲作は朝鮮半島南部や日本列島にも伝わった。

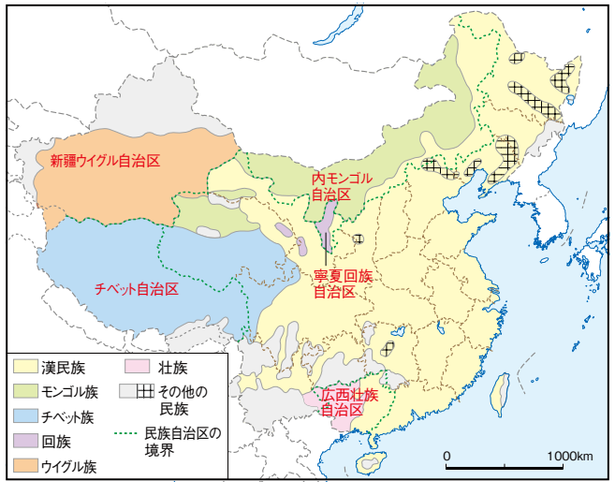
中国は，漢族と北方遊牧民などの周辺民族とが密接にかかわりながら，王朝の興亡や分裂・統一をくり返して領域を拡大し，多民族国家となっていった。その中で**漢字**や**儒家思想**，**仏教**などの文化が，中国を中心とする冊封体制のもとで東アジア全体で共有されるようになり，**東アジア文化圏**が形成された。

→p.26
→p.16
→p.19

▲2 **西安の街と城壁**　中国の伝統的な都市（中国語では「城市」）は，城壁で囲まれている。西安は前漢や唐の都がおかれ，当時は長安とよばれた。とくに唐代には，ユーラシアの各地から商人や留学生などが訪れる国際都市となった。

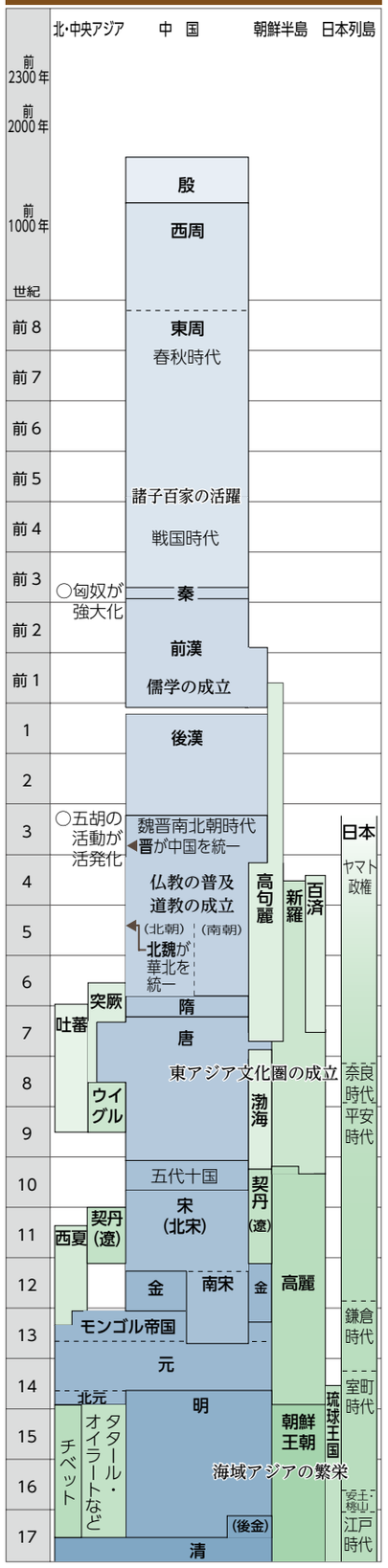
▼3 **黄河の景観**　黄河流域は，江南の開発が進むまで，中国の政治・文化の中心であった。

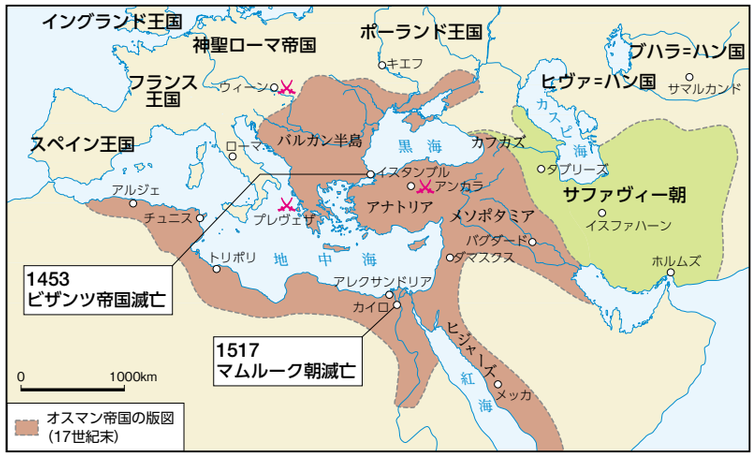
▶4 **長江の景観**



▲5 **現代中国の民族分布**　多数を占める漢族も，歴史の中でさまざまな民族との接触や融合をくり返しながら形成されてきた。

東アジア世界の歴史





▲1 **オスマン帝国とサファヴィー朝の領域**　オスマン帝国は，ビザンツ帝国を滅ぼすと，コンスタンティノープルを首都とし，のちにイスタンブルと改称した。

▲2 **第1次ウィーン包囲**　1529年の様子。ウィーンはオーストリアにおけるハプスブルク家の都であった。

ティムール帝国後の西アジアでは，どのような国家が繁栄したのだろうか。

スレイマン1世
(位1520～66)

オスマン朝最盛期のスルタン。ウィーン包囲を含む13回もの親征をおこない，領土を広げた。内政にも力を注ぎ，法律を整備したことから，「立法者」とよばれる。

13 オスマン帝国とサファヴィー朝

オスマン帝国の成立と発展

13世紀末，アナトリア西部に，トルコ系ムスリムの**オスマン朝**(1299～1922)が独立した。ビザンツ帝国との国境に位置したオスマン朝は，キリスト教徒の支配地に領土を広げ，バルカン半島に進出した。アナトリアのトルコ系諸国も併合し，バルカン，アナトリアに広がる国家を建設した。バルカン半島のキリスト教徒は，重い税の負担から逃れることのできるオスマン朝の支配を受け入れた。オスマン朝は，キリスト教徒の少年を徴集して編成した**イェニチェリ**軍団や，封土（ティマール）を分配された騎士（シパーヒー）からなる強力な軍団をもった。

バヤジット1世(位1389～1402)のとき，東方から**ティムール**(→p.56)が侵入し，オスマン朝はアンカラの戦いで敗北して一時断絶した。しかし，ティムールの勢力がバルカン半島にまでおよばなかったため，オスマン朝はここを拠点としてアナトリアを回復し，再生した。1453年には，**メフメト2世**(位1444～46，51～81)がコンスタンティノープルを占領して，ビザンツ帝国を滅ぼした。また，バルカン半島の支配を北方へ拡大し，黒海北岸のクリミア＝ハン国をも宗主権下に入れた。

オスマン帝国の繁栄

16世紀，**セリム1世**(位1512～20)は，カイロを占領してマムルーク朝を滅ぼした。アラビア半島のヒジャーズ地方も占領し，イスラームの聖地であるメッカ，メディナの保護権を獲得した。その息子**スレイマン1世**は，ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝**カール5世**(→p.88)やローマ教皇と対立し，キリスト教徒連合艦隊を撃滅して地中海の制海権を確保した。また，ハプスブルク家と対立するフランス国王を支援して，ハンガリーを占領し**ウィーンを包囲**(1529)した。一方で，東のサファヴィー朝とも戦い，カフカスからメソポタミア地方を確保した。広大な領土のうち，バルカン半島南部とアナトリア西部を直轄地とし，遠隔地では従来の支配体制を維持して間接的な統治をおこなった。16世紀半ばすぎ，帝国は最大領土となった。

しかしその後は，ハレム▶1の政治介入や官僚層の腐敗などにより支配機構がゆるみ，国庫は疲弊した。騎士たちへ与えた封土を没収して直轄地とし，広く**徴税請負**▶2がおこなわれた。一時的には財政安定がはかられたが，しだいに衰退へ向かっていった。広大な領土は，強力な国力を背景に維持されていたが，第2次ウィーン包囲に失敗し，1699年(1683)の**カルロヴィッツ条約**によって，初めて領土の縮小を認めた。

▲3 **イェニチェリ**　集められたキリスト教徒は，イスラームに改宗させられた。

▲4 **「王のモスク」（現イマームのモスク）**　アッバース1世がイスファハーンに建てたもの。当時繁栄したイスファハーンは，「世界の半分」と称えられた。

▶1　イスラーム世界では家屋内の女性専用部分を意味する。オスマン朝時代には宮廷ハレムがあり，そこでスルタンの母となった女性には政治的発言力をもつ者も少なくなかった。

▶2　徴税権を買い取った徴税請負人が一括して税を徴収するようになった。

サファヴィー朝

1501年，イラン北部のタブリーズに，サファヴィー教団の教主**イスマーイール**(位1501～24)が信徒のトルコ系遊牧民を率いて**サファヴィー朝**(1501～1736)を建国した。イランの伝統を継承し，勢力をイラン高原全体に広げ，シーア派の**十二イマーム派**を国教とした。オスマン朝などの周辺国家と対立し，抗争をくり返した。国内では軍事力が重要視され，トルコ系遊牧民が政治的に優位にあった。16世紀末に第5代**アッバース1世**が都を**イスファハーン**に移すと，アルメニア系やジョージア系の人々も活発に活動した。イスファハーンは東西交易の中心として繁栄した。特産品として絹が生産され，アルメニア系商人や，このころペルシア湾に進出したオランダやイギリスの東インド会社を通じてヨーロッパに運ばれた。シーア派法学も発展し，芸術面で多くの成果があらわれた。しかし18世紀前半，アフガーン人にイスファハーンを占領され，サファヴィー朝は滅亡した。(→p.34，89，91)

▲5 **アッバース1世**（右，位1587～1629）

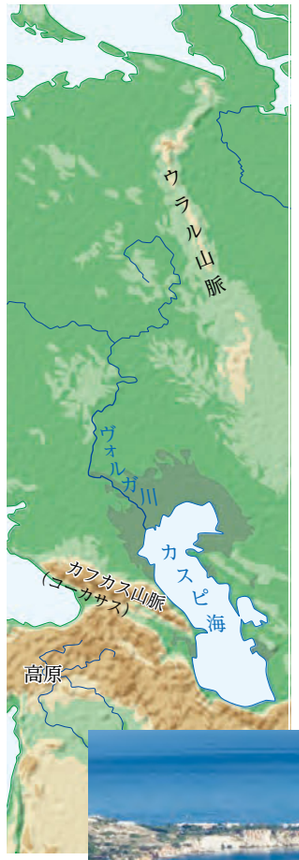
まとめ　西ではイスタンブルを都にオスマン帝国が成長し，16世紀にはメッカ，メディナの保護権を獲得するなど支配を拡大した。東ではシーア派のサファヴィー朝が興隆し，都イスファハーンは経済・文化の中心として栄えた。

第2章 ヨーロッパの文明

1節 ヨーロッパの文明―地中海からユーラシア大陸へ

▲1 **オランダの運河**　ヨーロッパは水量が豊富な河川が多く，運河などの内陸交通が発達した。

▲2 **ドイツ・フランスの国境地域に広がる農耕地帯**



▲4 **ドイツ南部の“黒い森”**　モミなどの針葉樹林が広がる山林地帯。

▲5 **イスタンブルとボスポラス海峡**（トルコ）　東西交通の要衝に位置するイスタンブルは，ビザンツ帝国の都コンスタンティノープル（→p.70）として発展した。

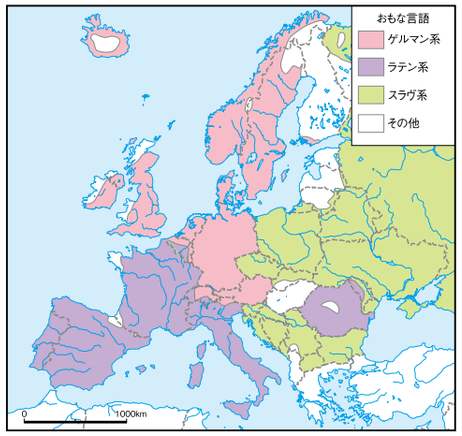
ヨーロッパは，**ウラル山脈**から大西洋へ，半島のように突き出した大陸で，南に**地中海**が広がる。この地域は3つに区分される。第一は，**アルプス山脈**と**ピレネー山脈**より南側の**地中海世界**である。ここではギリシア・ローマの古典文明が栄え，ヨーロッパ文明の源流をかたちづくった。

第二は，アルプス山脈とピレネー山脈の北側に広がる平原地帯で，**西ヨーロッパ世界**である。大西洋の海流の影響で温暖な気候に恵まれ，うっそうとした森林におおわれていたが，12世紀ごろから農耕が本格化し，開墾が進んで森林は減少していった。**ゲルマン人**（→p.68）が4世紀ごろから移り住み，中世には分権的な**封建社会**（→p.69）を形成した。

第三は，ウラル山脈から**カルパティア山脈**を経て，**バルカン半島**にいたる**東ヨーロッパ世界**である。起伏のない大平原地帯で，アジアと接するため，東西文明の交流の窓口でもあった。地中海の古典文明を受け継ぐ東ローマ（ビザンツ）帝国が1000年あまり存続し（→p.65,70），**スラヴ人**（→p.70）やアジアの諸民族も加わって，独自の世界を形成した。

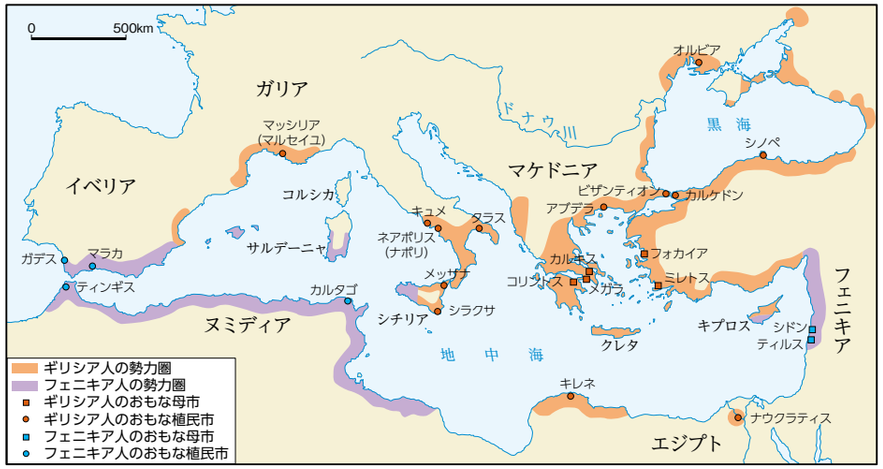
▲3 **スペイン南部のオリーブ畑**　乾燥した地中海沿岸では，オリーブやブドウ・柑橘類などの果樹栽培が古くからおこなわれていた。

▲6 **エーゲ海とギリシアの街並み**（クレタ島）　地中海沿岸地域には，石造りの建物が建ち並ぶ。



◀7 **現在のヨーロッパの言語分布**

ヨーロッパ世界の歴史



◀1 ギリシア人のポリスと植民市

古代地中海世界には，どのような文明が形成されたのだろうか。

14 古代地中海世界

地中海文明の誕生

前3000年紀後半[▶1]から，オリエント文明の影響を受けて，地中海上に海洋文明が誕生した。なかでも**フェニキア人**→p.50は，地中海沿岸に港市を築き，海上交易によって栄えた。やがて前8世紀ごろになると，**ギリシア人**がエーゲ海周辺に**ポリス**とよばれる都市国家を形成しはじめた。ポリスはそれぞれが植民市をつくり，地中海の交易にたずさわった。ギリシア人はポリスどうしで対立したが，共通の言語と文化を共有し，ギリシア人としての一体性を自覚していた。

前5世紀初めに，東方のアケメネス朝ペルシアがギリシアに軍勢をさし向けると，**アテネ**を中心とするポリスは連合してこれに立ち向かい，ペルシア軍を敗退させた（**ペルシア戦争**）。ペルシア戦争後，アテネは全ポリスの頂点に立ち，国内では成人男子市民が平等に国政に参加する**直接民主政**が実践[▶2]されるようになった。

ギリシア人は，オリエントの先進的な文明を継承しながら，独自の文化を生み出した。ギリシアの文化の特徴は，合理的な思考にあり，医学，数学などの自然科学や，哲学などが登場した。

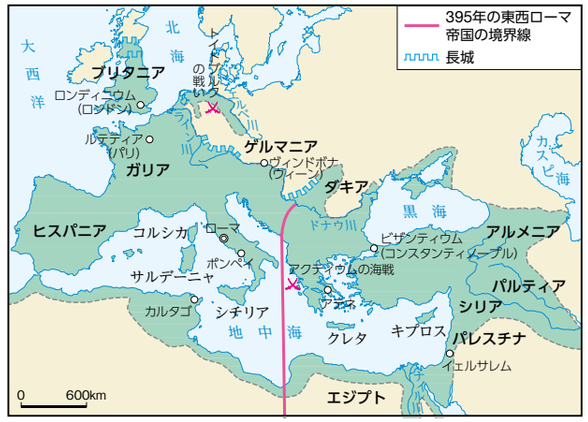
ヘレニズム

前4世紀になると，バルカン半島中部にあった**マケドニア**が台頭し，ギリシアのポリスを服属させた。マケドニアの**アレクサンドロス大王**は，東方への大遠征をおこない，アケメネス朝ペルシアを滅ぼし，中央アジアからインド一帯までも征服して，大帝国を築いた→p.51。アレクサンドロスの死後，帝国は分裂したが，この遠征と征服によって東西の交流が進み，東地中海文明とオリエント文明が融合して，**ヘレニズム文化**が生まれた。

▶1 1000年を単位として西暦を数える方法。前3000年紀とは，前3000年から前2001年までをいう。

▶2 女性や奴隷，外国人には参政権はなかった。

アレクサンドロス大王
（位　前336～前323）
前334年に東方遠征に出発し，エジプトなどの各地に都市アレクサンドリアを建設した。その数は70以上といわれ，東西交流の拠点となった。



▲2 1～2世紀のローマ帝国

▲3 ポンペイの遺跡と壁画　ポンペイはナポリ近郊にあったローマ時代の商業都市。後79年，火山の噴火によって火山灰に埋没した。

ローマ帝国

ローマは，イタリア半島中部にラテン人が建てた都市国家からはじまる。前6世紀には王政にかわって**共和政**をとり，イタリア半島の統一を進めた。その後周辺地域にも支配を広げ，地中海で優勢を誇ったフェニキア人の国**カルタゴ**と争い（**ポエニ戦争**前3世紀～前2世紀），西地中海全域の支配権をにぎった。さらにマケドニアやギリシアを征服して東地中海にも領土を広げ，前2世紀までに地中海の覇者となった。

前1世紀には，**カエサル**前100～前44のガリア遠征によって，アルプス以北の西ヨーロッパもローマの領土に組み入れられた。独裁者となったカエサルが暗殺されたのち，あとを継いだ**アウグストゥス**のもとで，事実上の**帝政**前27がはじまった。それから2世紀にわたり，ローマは地中海からヨーロッパ一帯を交易で結び，「**ローマの平和**（パクス＝ロマーナ）」とよばれる繁栄を謳歌した。

▲4 アウグストゥス（位　前27～後14）

キリスト教の誕生とローマ帝国の崩壊

キリスト教は，ローマ帝国の属領であった**パレスチナ**で，ユダヤ人の**イエス**が説いた教えにはじまる。イエスは迫害されて処刑されたが，その後ローマ帝国内に信徒を増やしていった。3世紀になると，ゲルマン人の侵入などの影響もあって，ローマ帝国は混乱状態におちいった。この中で，ローマは**キリスト教を公認**し，**国教に採用**して，危機を打開しようとした。313

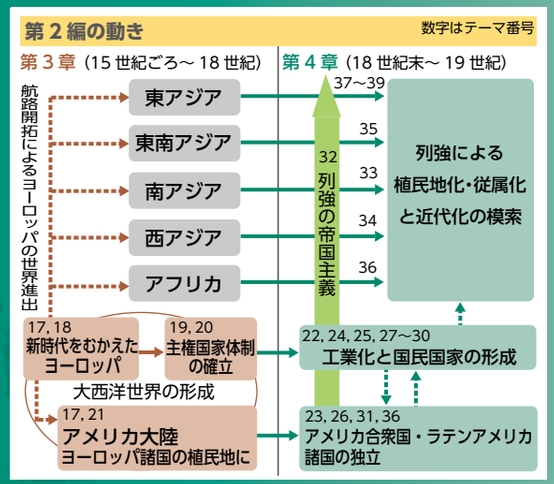
しかし帝国の解体は止まらず，395年には東西に分割された。**東ローマ（ビザンツ）帝国**は，コンスタンティノープルを都として，その後1000年あまり続き，中世ビザンツ世界を形成することになる。しかし**西ローマ帝国**は，ゲルマン人の侵入や属領の離反にさらされ，476年に滅びた。これによって古代地中海世界の時代は幕を閉じた。

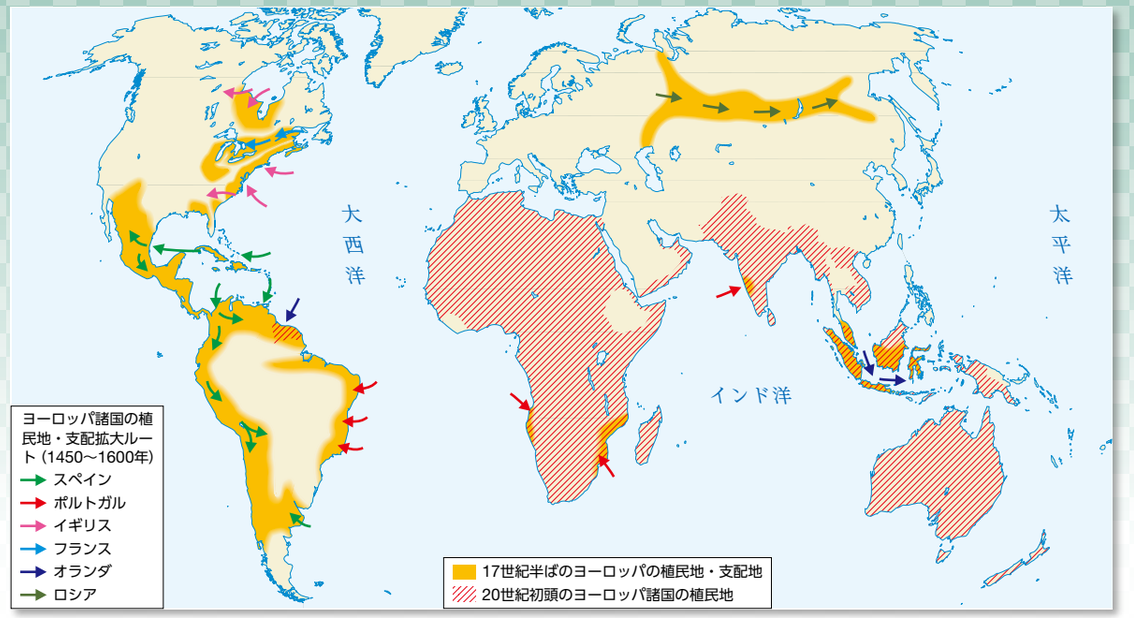
イエス
（前4ごろ～後30ごろ）
ユダヤ教の形式的な律法遵守を批判し，心から神にしたがうこと（神への愛）や隣人愛を説いた。イエスの言動は『新約聖書』の福音書にまとめられている。

まとめ　古代地中海世界ではギリシア人のポリスを中心に合理的な文化が生まれ，続いて東西文化の融合したヘレニズム文化が東方に栄えた。さらにローマが地中海を内海とする帝国に発展し，そのもとでキリスト教が形成された。

第2編

一体化する世界





ヨーロッパ諸国の世界進出（19世紀後半の列強の支配地域は p.124 図1 を参照）

海域世界から海洋世界へ

それぞれ独自の文化を発展させたユーラシア大陸の複数の文明圏は，交易や宗教の伝播（でんぱ）などを通じて，古くから交流をくり返してきた。10世紀をすぎるころから，この交流に新しい局面（きょくめん）が開かれる。陸上では，モンゴル人の活動によって東西を結ぶ交易や交渉の道が開かれた。海上では，アジアと東アフリカを囲むさまざまな海域を結んで，交易を通じたネットワークが形成され，人とモノが海を介（かい）して交流するようになった。それぞれの文明圏に生きる人々にとって，船をつくること，海を渡って商品を交換することが，生活のあり様を変えるような意味をもつ時代が訪れた。

海洋を渡って

15世紀に全盛をむかえるアジアの海域ネットワークは，世界の人々が海を介して出会い，海をこえて一つの世界に結びついていく時代の先駆（さきが）けであった。同じころ，ヨーロッパの人々は，大西洋を渡る技術と知識を獲得し，ユーラシアの海域ネットワークに参入するとともに，未知の大陸アメリカにいたった。大洋を横断する術（すべ）を得たヨーロッパ人は，世界各地の沿岸（えんがん）に姿をあらわし，前哨（ぜんしょう）基地を築き，交易をおこない，可能であれば直接支配することも辞（じ）さなかった。ヨーロッパ人は，広大な海洋を渡り，世界の人々と交渉することができた。16世紀から19世紀までの世界の歴史は，この技量を生かしたヨーロッパ人が，世界に進出し，世界を結びつけていく過程である。

カリブ海，西インド諸島のプランテーション（→ p.94）

大西洋世界

ヨーロッパ人による世界進出の最初の対象は，アメリカ大陸であった。数千万の人口を擁（よう）したアメリカの文明圏は，ヨーロッパ人によってまたたく間に征服され，アメリカの中南部はスペインの植民地となった。その後200年を経（へ）て，アメリカ全体がヨーロッパ諸国の植民地となった。ヨーロッパの言語と文化が移植されたアメリカは，ヨーロッパ文明圏に取り込まれた。さらにはアフリカ大陸の西部も，奴隷（どれい）貿易を通じてヨーロッパ，アメリカ植民地との交渉を深めていった。こうして18世紀までに，大西洋世界という新たな商業圏と文明圏が形成されていった。

一体化する人類

16世紀にはじまるヨーロッパ人の世界進出の歩みは，決して一様ではなかった。しかし19世紀になると，欧米諸国は新しい力を獲得して，世界進出の歩みを速めた。欧米諸国に国民国家が誕生し，国ごとに国力を増そうとする競争が激しくなった。工業化がはじまり，新しい生産技術と経済力を身につけた欧米諸国の影響は，アジアやアフリカへも直接およぶようになる。

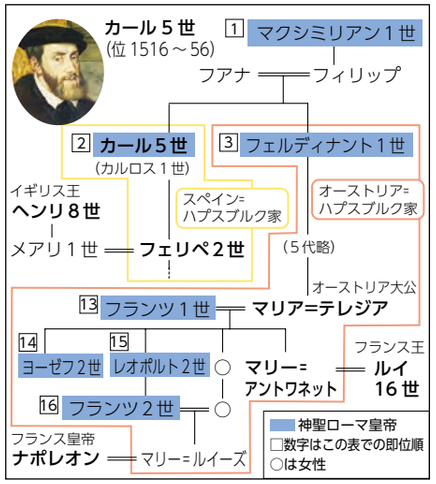
19世紀には，「列強（れっきょう）」とよばれる欧米の大国によって，インドや東南アジア諸地域は植民地となった。イスラームの大国オスマン帝国も列強の圧迫（あっぱく）を受けた。安定と繁栄を誇ってきた東アジアの文明も，欧米列強の進出に対応して，近代化という名の自己改革をせまられた。人類が一体化へと向かい，地球文明が出現しはじめたとき，その主導権（しゅどうけん）は欧米諸国ににぎられていた。

アヘン戦争（→ p.134）

第2編のポイント

★ヨーロッパ人の世界進出は世界をどう変えたのだろう？
★アジアやアフリカへの影響とは？

▲1 **17世紀のヨーロッパ** ハプスブルク家の支配領域は，スペインのアメリカ植民地にもおよんだ。



▲2 **ハプスブルク家の系図**

主権国家体制とは何か。また，その歴史的意義を考えてみよう。

19 主権国家体制

主権国家群の形成

宗教改革によってキリスト教の分裂が決定的になるにつれて，ヨーロッパ全体に権威をおよぼしてきたローマ教皇や皇帝の力が弱まった。封建制度が崩壊し，各地の領主権力も低下すると，国境に囲まれた領域（国土）を排他的に支配する独立した国家が出現しはじめた。これを**主権国家**とよび，主権者は外部から干渉されることなくその国を統治できる原則ができあがった。

それぞれの主権国家は，統合の基盤となる教会をカトリックかプロテスタント諸宗派から選んだ。**神聖ローマ帝国**（ドイツ）→p.68では，領邦君主[▶1]が独自に宗派を選択することが認められたので，領邦主権が強まった。フランスでは，宗教対立に貴族の勢力争いが重なり，内乱状態となったが，最終的にはカトリックを国の教会とすることになった。このように主権国家は，特定のキリスト教の宗派を国定教会と定めることで，支配の基礎を固めることができた。

▶1 ドイツ一帯は，神聖ローマ帝国として統合されていたが，帝国を構成する各地の地方国家の独立性が強く，皇帝の権力は地方国家におよばなかった。この地方国家を領邦，支配者を領邦君主とよぶ。

ハプスブルク家とスペインの帝国

16世紀最強の主権国家はスペインであったが，スペインを支配した**ハプスブルク家**は，神聖ローマ皇帝としてドイツにも権威をおよぼし，ヨーロッパを代表する大君主であった。しかし16世紀半ば，ハプスブルク家は支配地域を二分割し，本拠地オーストリアとその周辺をオーストリア＝ハプスブルク家が，スペインをスペイン＝ハプスブルク家が継承することになった。

スペインは16世紀後半に最盛期をむかえ，ヨーロッパにおけるカトリック世界の盟主となり，ネーデルラント，ナポリなどにも領土をもつ複合国家を形成した。さらに広大なアメリカ植民地を領有し，「日の沈まぬ帝国」を築いた。

▲3 **フェリペ2世**（位1556～98）カール5世の退位後，ハプスブルク家はオーストリアとスペインに分けられた。スペインではフェリペ2世があとを継ぎ，スペインの黄金時代が訪れた。

世界の歴史と日本

オランダのアジア貿易と江戸時代の日本

オランダがアジアとの貿易をおこなうために設立した東インド会社は，ジャワ島のバタヴィア（現在のジャカルタ）に根拠地をおき，アジア各地に交易の拠点をおいた。江戸時代に長崎の出島におかれたオランダ商館も，その一つである（→p.34）。

貿易統制をおこなう日本の市場を独占したオランダは，日本の銀を資金源としてアジア交易に優位に参加することができた。他方，江戸幕府に毎年提出した『オランダ風説書』は，先端技術や世界情勢について，日本に豊かな情報を伝えた。

オランダ東インド会社の銅貨 銅貨にあるVOCはオランダ東インド会社のロゴマーク。この会社は国家のように通貨を発行して世界各地で広く流通させ，軍隊ももっていた。

▲4 **「戦争の惨状」** 三十年戦争は，各国の正規軍のほかに多くの傭兵が参戦した戦争で，略奪が横行した。この絵は，あまりに残虐な行為をおこなった傭兵を処刑しているところ。（カロ画）

三十年戦争と主権国家体制

主権国家は，ヨーロッパの覇権と海外の商業圏や植民地領有をめぐって，対立と競争をくり広げた。17世紀に入ると，人口が停滞して経済が低迷し，各国間の対立はますます激しくなった。この「17世紀の危機」を象徴するできごとが**三十年戦争**（1618～48）であった。この戦争は，オーストリア＝ハプスブルク家が支配するベーメンでの反乱を発端に，各国が参戦する国際戦争となった。この過程で，ハプスブルク家の皇帝としての権威は衰え，スペインの国力もかたむき，フランスの力が強まった。

三十年戦争を終結させた1648年の**ウェストファリア条約**で，スイスとオランダの独立が認められ，ドイツにおける領邦主権が確認され，主権国家間の対等な関係にもとづく競争と外交の原則が定まった。このような国際関係のありかたを**主権国家体制**[❖]とよぶ。

❖主権国家体制
ウェストファリア条約がこの体制を確立させたところから，ウェストファリア体制ともよばれる。また，オランダのグロティウス（1583～1645）は，この時代の主権国家間の紛争や戦争の調停に関する原則を体系化し，**国際法**の父とよばれる。

オランダの躍進

17世紀の新たな国際関係の中で台頭してきたのは，**オランダ**であった。スペインの支配下にあったオランダは，16世紀後半に独立戦争をおこし，ウェストファリア条約で正式に独立を達成したが，この過程で経済が飛躍的に発展した。圧倒的な海運力，最先端の造船技術と毛織物技術を備え，バルト海や北海での貿易に加えて，国内産業も繁栄した。さらに海軍を創設してアジアやアメリカへ積極的な進出をはかり，ポルトガルを追い払ってアジア各地に商館を設け，アジア貿易を独占した。国際商業と諸産業によって資金力をつけたオランダは，金融・投資部門→p.34でも優位に立ち，首都**アムステルダム**は，国際商業と金融の中心地として繁栄した。

▲5 **「織物業者組合の理事たち」**（レンブラント画）商業や金融に従事する都市の商人たちのもとで，オランダでは独自の市民文化が開花し，黄金時代とよばれる繁栄を謳歌した。絵画でも独自の表現が生まれ，市民たちの姿を描く群像画に傑作が生まれた。（アムステルダム国立博物館蔵）

まとめ 近世のヨーロッパでは，国土を排他的に支配する独立した主権国家が出現し，三十年戦争後には国家間の対等な関係にもとづく外交の原則が定まった。この主権国家体制は現在にいたるまで国際関係の基盤となっている。

▲1 **立ち上がる平民**　岩の下敷きになっていた平民が立ち上がり，最後は３身分がともに岩を担いでいる。

この岩は何をあらわしているのだろうか。

▲2 **球戯場の誓い**　議場から締め出された議員たちが，室内球戯場に場所を移して，憲法制定まで解散しないことを誓った。❶初代国民議会議長となり，バスティーユ監獄襲撃後パリ市長に選ばれたバイイ　❷ジャコバン派の指導者となるロベスピエール

24 フランス革命

フランス革命はなぜおこったか。また，どのように展開したのだろうか。

アンシャン＝レジームの破綻

フランスは，17 世紀後半のルイ 14 世の時代に安定した君主政を実現し，ヨーロッパを主導する大国となった。この君主政は**絶対王政**ともよばれるが，国王が独裁者だったわけではなく，身分制の原則にもとづき，**第一身分**（聖職者）と**第二身分**（貴族）にはさまざまな特権と権威が認められていた。しかし，**第三身分**（平民）には政治的な権利が認められなかった。フランス革命前のこのような社会秩序は，**アンシャン＝レジーム**（旧体制）とよばれる。→p.90

18 世紀後半になると，啓蒙主義やアメリカ独立革命の影響もあって，社会や政治の改革を求める意見が出されるようになった。フランスは七年戦争とアメリカ独立戦争に莫大な戦費をつぎ込んだため，1780 年代には国家財政が危機的な状況におちいった。国王ルイ 16 世（位1774～92）は，改革派を登用して財政再建にあたらせたが，特権身分の反発にあい，改革は挫折した。→p.93

フランス革命

国家財政の破綻に加えて，凶作や経済不況が重なり，フランスでは騒乱が頻発して危機的状況になった。1789 年 5 月，国王は**三部会**を召集して事態を収拾しようとしたが，三部会は議決方法をめぐって紛糾し，議事に入ることすらできなかった。第三身分代表は，独自に自分たちの部会を**国民議会**とよび，憲法制定まで解散しないことを誓った（**球戯場の誓い**）。

国王はこの動きに譲歩し，**憲法制定議会**を成立させたが，直後に軍隊を動員して議会に圧力をかけた。これに憤慨したパリの民衆は，1789 年 7 月 14 日，バスティーユ監獄を襲撃して，武器や弾薬を略奪した。この動きは全国に広がり，領主館の襲撃があいついだ。8 月，

▶1　三部会はフランスで 14 世紀から開かれていた身分制議会。第一身分・第二身分・第三身分の代表で構成され，国政の必要時に国王が召集して諮問していた。17 世紀初頭を最後に召集されなくなり，1789 年に 175 年ぶりに開かれた。

▲3 **バスティーユ監獄の襲撃**

フランス人権宣言（抜粋）

第１条　人は生まれながらにして自由であり，権利において平等である。社会的差別は共同の利益に基づいてのみ，設けることができる。

第２条　あらゆる政治的結合の目的は，人間の消滅することのない自然権の保全にある。自然権とは，自由・所有権・安全と圧政に対する抵抗である。

第３条　あらゆる主権の原理は，基本的に国民に存する。いかなる団体，いかなる個人といえども，明白に国民から発したものでない権威を行使することはできない。

第 17 条　所有権は神聖不可侵の権利であるから，何人も適法に確認された公共の必要が，明白にそれを要求する場合で，また公正な事前補償が条件となった場合でなければ，これを奪われることはない。

▲4 **人権宣言**　中央に自由の象徴のフリジア帽をかぶせた槍，左には古い体制をあらわす鎖を断つ女性が描かれ，右の天使は神のまなざしをあらわす目を指し示している。石板に書かれているのはモーセの十戒（→p.51）にならっている。フランス第五共和国憲法前文にも，「1789 年の宣言が定める人権および国民主権の原理を厳粛に宣言する」とあり，人権宣言は現在でも生き続けている。

議会は**封建的特権の廃止**を決議し，**人権宣言**を採択した。人権宣言には，**基本的人権**，**国民主権**，**私有財産権の不可侵**がうたわれた。さらに議会は，教会財産の没収やギルドの廃止などを決め，アンシャン＝レジームの社会原理は完全に否定されることになった。

革命戦争と恐怖政治

1791 年，憲法の制定によって新たに開会された**立法議会**で実権をにぎった**ジロンド派**は，92 年春に反革命の姿勢をとるオーストリアに宣戦した。革命の波及を恐れたオーストリアとプロイセンの連合軍がパリにせまると，フランス各地から義勇兵が集まり，パリ民衆とともに王宮を襲撃して国王一家を捕らえ，王権が停止された。1792 年 9 月，男性普通選挙による**国民公会**が成立し，共和政が宣言された（**第一共和政**）。国民公会で優勢となった**ジャコバン派**は，1793 年 1 月，ルイ 16 世を処刑した。

国王処刑の報はヨーロッパ諸国に衝撃を与え，イギリスのよびかけで**対仏大同盟**が結成され，フランス包囲網が築かれた。この危機に対して，フランス人の国民意識は高揚し，国民公会は国民総動員令を発して徴兵制を実施した。ジャコバン派の指導者ロベスピエール（1758～94）は，領主が農民に課していた地代を無償で廃止することを決め（**封建的特権の無償廃止**），領主支配から農民を解放したほか，第一共和政成立日を元日とする**革命暦**（共和暦）を導入し，**メートル法**を制定するなどの改革を断行した。これらの改革は，教会の権威や伝統的権利を否定し，社会を合理的な基準で再編しようとする試みであった。

その一方でロベスピエールは，**公安委員会**のもとに独裁体制をしき，政敵を次々と粛清して**恐怖政治**をおこなった。これに対して国民公会内部やブルジョワ階層からも反発がおき，1794 年にロベスピエールは処刑され，恐怖政治は終わった（**テルミドール９日のクーデタ**）。

▶2　中世ヨーロッパの都市で形成された同業者組合をギルドという。ギルドに属する商人の保護と規制をおこなう排他的な組織で，ギルド以外の営業の自由を禁止するなどの強制力をもっていた。時代が進むにつれてその強制力は弱まったが，自由な経済活動をさまたげるアンシャン＝レジームの社会組織の象徴と見なされていた。

▲5 **ルイ 16 世の処刑**　処刑には断頭台（ギロチン）が使われた。

▶3　産業資本家などの中上層の市民。

まとめ　財政危機打開のため召集された三部会では，第三身分が国民議会を結成し，封建的特権の廃止や人権宣言を採択した。その後，周辺国との革命戦争の中，共和政を宣言して国王を処刑したが，やがて恐怖政治におちいった。

▲1 **ナポレオンの戴冠**　1804年，パリのノートルダム大聖堂でおこなわれた戴冠式の様子。ナポレオンは自分の手で皇帝の冠をかぶり，次に王妃ジョゼフィーヌに皇后の冠を載せた。❶教皇からではなく自分で戴冠した皇帝ナポレオン１世　❷ナポレオンから皇后冠を授けられるジョゼフィーヌ　❸息子の皇帝戴冠に反対して実際には出席しなかったナポレオンの母　❹暗い表情で祝福を授けるローマ教皇ピウス７世　❺ナポレオンの弟ルイ（ナポレオン３世〔→p.117〕の父）　❻のちにウィーン会議で正統主義（→p.110）を提唱するタレーラン（ダヴィド画，ルーヴル美術館蔵）

ナポレオンはどのようにして台頭したか。また，その帝国はどのような結末をむかえただろうか。

25 ナポレオンの大陸支配

ナポレオンの台頭

フランスではテルミドール９日のクーデタののち，1795年の新憲法にもとづき，**総裁政府**が成立した。しかし政局は安定せず，対外戦争も終わる気配を見せなかった。これ以上の混乱を嫌い，安定を求める人々の気運を背景に，軍人**ナポレオン＝ボナパルト**（1769〜1821）が台頭してきた。

ナポレオンは1796年のイタリア遠征で名声を獲得し，1798年にエジプトに遠征したが，1799年，遠征先のエジプトから急遽フランスに戻り，総裁政府を倒して自らを**第一統領**とする**統領政府**を立てた（**ブリュメール18日のクーデタ**）。権力をにぎったナポレオンは，イギリスと**アミアンの和約**（1802）を結んでフランス包囲網を解き，国内では，私有財産権の不可侵，法の前の平等，経済活動の自由などを定めた民法典（**ナポレオン法典**）を制定して，革命の成果を定着させた。1804年，ナポレオンは国民投票によって皇帝に選ばれ，**ナポレオン１世**として帝位につき，**第一帝政**が成立した。

ナポレオン帝国の形成と崩壊

ナポレオンは周辺諸国に転戦して，オランダ，スペインなどを次々と服属させていった。フランス・スペイン連合艦隊は，1805年のトラファルガーの海戦でイギリス艦隊に敗れ，イギリス上陸は阻止された。しかし大陸では，**アウステルリッツの戦い**でオーストリア・ロシア連合軍に勝利し，1806年には，ドイツ西部に**ライン同盟**を組織してフランスの保護下におき，神聖ローマ帝国を消滅させた。さらにプロイセンの領土の大半を獲得し，ロシアを除くヨーロッパのほぼ全域が，フランスの支配するところとなった。これを**ナポレオン帝国**とよぶ。

1806年，ナポレオンはイギリス経済の孤立化をねらって，ヨーロッパ諸国とイギリスとの通商を禁じる**大陸封鎖令**を発布した。この政策は，イギリスとの経済関係を深めていた大陸諸国には痛手となり，各国で反フランス感情が高まった。1812年，大陸封鎖を無視してイギリスとの通商を再開したロシアに制裁を科すため，ナポレオンは**ロシア遠征**をおこなった。しかし厳しい寒さのため敗走を余儀なくされ，これをきっかけに反フランス同盟軍は攻勢に転じ，1813年，ライプツィヒでナポレオン軍を破った（**諸国民戦争**）。ナポレオンは退位し，一時復位を果たしたものの，1815年の**ワーテルローの戦い**に敗北して，セントヘレナ島に流刑となり，ナポレオン帝国も崩壊した。

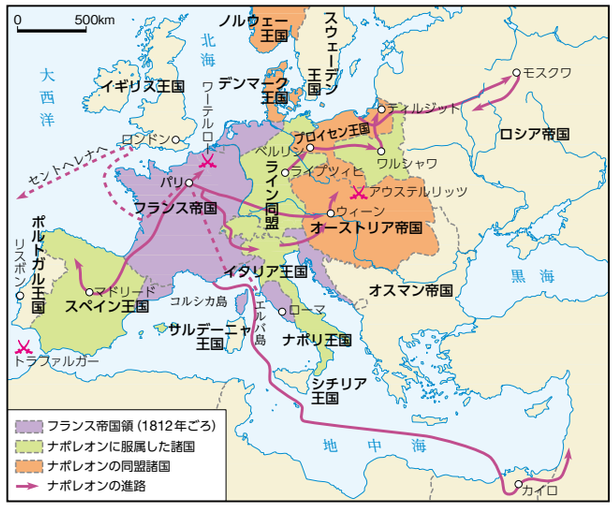
ロゼッタ＝ストーン（大英博物館蔵）　❶ヒエログリフ（神聖文字）　❷デモティック（民用文字）　❸ギリシア文字

ロゼッタ＝ストーン

ナポレオンのエジプト遠征の際，1799年にフランス軍兵士が偶然発見した石碑。紀元前196年に刻まれた石碑の一部で，上から順に３種類の文字で文章がつづられている。最下段がギリシア語で書かれていたので，上段のヒエログリフ（神聖文字），中段のデモティック（民用文字）を解読する手がかりとなった。フランスの言語学者シャンポリオン（1790〜1832）は，これを手がかりに古代エジプトのヒエログリフ解読に初めて成功した。

ナポレオン軍がエジプトで見つけたロゼッタ＝ストーンが，なぜ大英博物館にあるのだろうか。

▲2 **ピットとナポレオン**　対仏大同盟をよびかけたイギリスの首相ピット（左）とナポレオン（右）とで，地球というケーキを切り分けて食べようとしている。



▲4 **ナポレオンのヨーロッパ支配**

▶3 **ナポレオン法典**　私有財産権など革命の成果を取り入れてナポレオンが完成させた。フランス人民の民法典として発布され，のちにナポレオン法典とよばれるようになったこの法典は，ナポレオン帝国に組み込まれた地域をはじめ，多くの国々の近代民法典に影響を与えた。

ナポレオン法典

第545条　何人も，公益上の理由により，かつ正当にして事前の補償を受けないかぎり，その所有権の譲渡を強制されることはあり得ない。

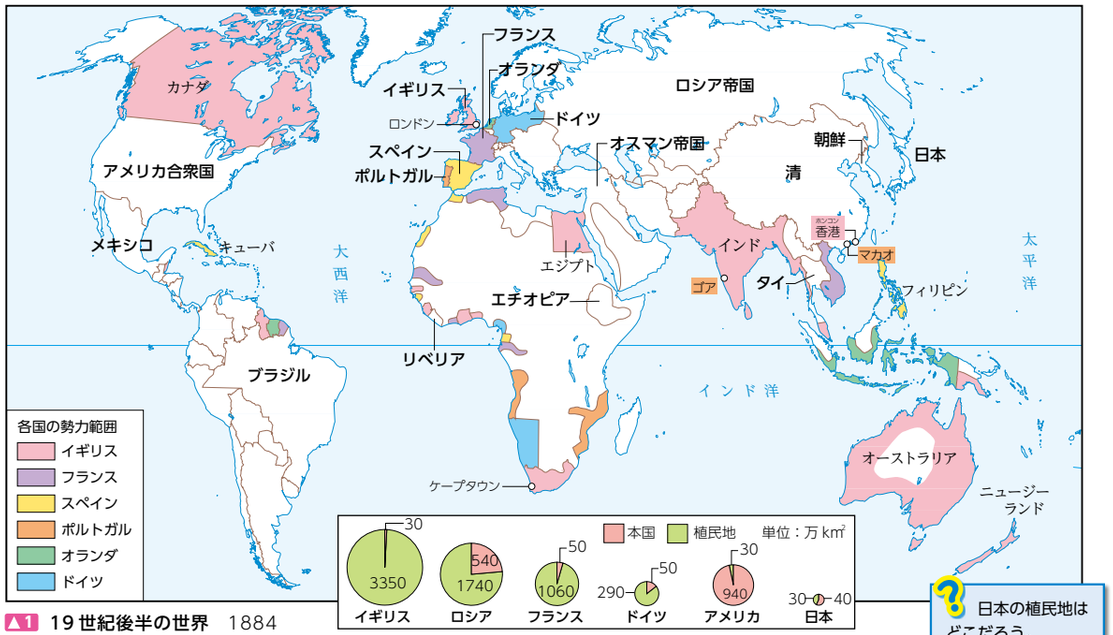
神聖ローマ帝国の消滅とオーストリア帝国

それまで神聖ローマ皇帝の位を継承してきたオーストリアは，神聖ローマ皇帝位の廃止を宣言し，新たにオーストリア皇帝を名乗った。この**オーストリア帝国**は，ハンガリー（マジャール）・チェコなど，多数の民族が服属する東欧の大国となった。

▲5 **「1808年５月３日の銃殺」**（ゴヤ画）　スペインに進攻したフランス軍が，反抗したスペイン市民を銃殺に処す凄惨な光景を描いたもの。この絵にあらわれているように，武力による強引なフランスの侵略と支配に対する怒りは，ヨーロッパ諸国の国民意識を覚醒させるきっかけとなった。（プラド美術館蔵）

まとめ　安定を求める人心を背景に政権をにぎったナポレオンは，対外戦争を終わらせ，ナポレオン法典を定めるなどの成果をあげ，皇帝となった。軍事力でヨーロッパ大陸を支配したが，諸国民の抵抗を招き，帝国は崩壊した。

3節 帝国主義とアジア・アフリカの従属化



▲1 19世紀後半の世界　1884年までの列強の植民地。

▲2 列強の本国と植民地の面積　1914年。(『帝国主義』)

日本の植民地はどこだろう。

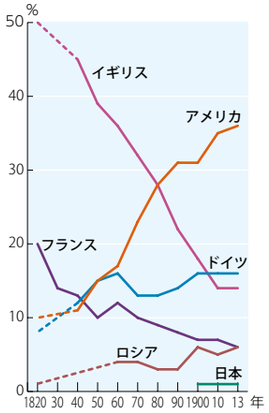
第2次産業革命とは何か。また，世界にどのような影響を与えたのだろうか。

32 第2次産業革命と欧米諸国

第2次産業革命と帝国主義

綿工業にはじまった産業革命は，鉄鋼業・石炭業・機械工業の発達をもたらした。鉄道などの交通機関の発達は，国内市場の統一だけでなく，世界市場の形成をうながすことになった。1870年代ごろから，科学技術の発達を背景に，鉄鋼・化学を中心とした重化学工業化が進み，エネルギー源も石炭・蒸気から石油・電気にかわった。この動きを**第2次産業革命**という。

重化学工業の発達にともなって大型化した企業は，巨額な資本を調達するために銀行資本と結びついて金融資本を形成するようになり，製品だけでなく資本も輸出するようになった。各国では，国内的には，弱体な企業が淘汰され独占が進行することとなった。また，外に向かっては，不況を克服するため，市場と原料供給地としての植民地獲得をめざすようになった。このような資本主義の新たな傾向とともに生じた列強の世界分割の動きを，**帝国主義**という。



▲3 世界工業生産に占める各国の割合（『世界経済の成立と発展』）

イギリスの割合が急落しているのはなぜだろう。

イギリスとフランス

イギリスは，ヴィクトリア女王のもとで最盛期をむかえた。数度の選挙法改正により**二大政党制**が確立し，**保守党**と**自由党**が政権交代をくり返した。保守党政権のもとでは帝国主義政策が推進され，ディズレイリ首相は，**スエズ運河会社の株式を買収**してインドとの通商路をおさえ，イギリス領**インド帝国**を成立させた。一方，自由党政権のもとでは内政の充実がはかられ，グラッドストン首相は選挙法改正，アイルランドの地位向上，[▶1]初等教育の義務化などを実施した。イギリスは，「世界の銀行」として世界市場での優位を維持し，ロンドンの**シティ**は国際金融の中心であり続けた。

フランスでは，第三共和政が成立したが不安定な政権が続いた。[▶2]ビスマルクの外交によって国際的に孤立したフランスは，アフリカやインドシナなどに進出し，イギリスに次ぐ広大な植民地を獲得した。

ドイツ・アメリカ・ロシア・日本

ドイツでは，ビスマルクの引退後，皇帝ヴィルヘルム2世が世界再分割を求めて「**世界政策**」をおし進め，海軍の増強やバグダード鉄道の敷設権獲得などでイギリス，フランス，ロシアなどとの緊張を高めた。

アメリカは，19世紀末の**フロンティアの消滅**後，積極的に海外へ進出した。アメリカ＝スペイン戦争を経て太平洋やカリブ海に進出し，20世紀初頭にはパナマ運河を建設するなど，勢力を拡大していった。

ロシアは，1860年の北京条約で沿海州を獲得し，極東進出の拠点として**ウラジヴォストク**を建設した。1890年代，フランス資本の投資を得て産業革命が本格化し，**シベリア鉄道**が着工された。

明治維新後に近代化に成功した日本は，植民地獲得をめざして朝鮮半島や台湾，中国東北部への進出をはかった。

市民生活の変化

19世紀後半の欧米では，資本主義の発達を背景に，人々の生活が大きく変化した。交通機関の発達は，仕事とよりよい生活を求める人々の移動を容易にし，多くの**移民**が生じた。また，労働時間の短縮を背景に，ミュージックホールやプロスポーツなどの大衆文化がさかんになった。

その一方で，植民地とされたアジアやアフリカの各地では，欧米諸国の需要を満たすため，単一の商品作物を栽培する**モノカルチャー経済**がおしつけられ，伝統的な社会の変容をせまられた。これに反発した人々の中から民族運動が生まれていった。

ファラデー（英）	電磁誘導の法則（1831），電気分解の法則発見（1833）
マイヤー（独）・ヘルムホルツ（独）	エネルギー保存の法則発見
レントゲン（独）	X線の発見（1895）
キュリー夫妻（仏）	ラジウムの発見（1898）
ダーウィン（英）	進化論発表（1858），『種の起源』（1859）
メンデル（墺）	遺伝の法則発表（1865）
コッホ（独）	コレラ菌発見（1883），ツベルクリン製造（1890）
北里柴三郎（日）	ジフテリア・狂犬病の血清治療発見（1890），ペスト菌発見（1894）

志賀潔（日）	赤痢菌発見（1898）
ノーベル（スウェーデン）	ダイナマイト発明（1867）
モールス（米）	電信機発明（1837），モールス信号考案
ベル（米）	電話機発明（1876）
マルコーニ（伊）	無線電信の実験成功（1895）
エディソン（米）	蓄音器（1877），白熱電灯（1879）など発明
ダイムラー（独）	自動車発明（1886）
ライト兄弟（米）	飛行機発明（1903）

▲4 19世紀における科学の発達

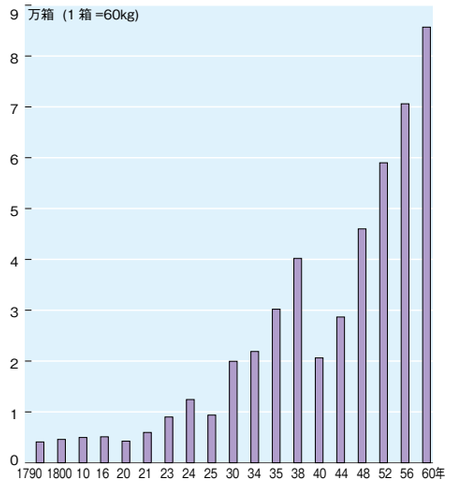
▶1 アイルランド土地法を成立させ，アイルランド人の小作人の地位を向上させたが，アイルランド自治法の制定は実現できなかった。

▶2 1887～89年にはブーランジェ事件（元陸軍大臣ブーランジェによるクーデタ未遂事件），1894～99年にはドレフュス事件（ユダヤ人のドレフュス大尉に対するスパイ容疑事件）がおこり，ドレフュス事件では，真犯人の判明後も，軍と政府は威信を維持するためにその事実を隠した。

▲5 19世紀末のサッカー　19世紀半ばにイングランドで生まれたサッカーは，すぐにスコットランドなど各地に広まった。イギリスでは1888年にプロリーグが設立された。

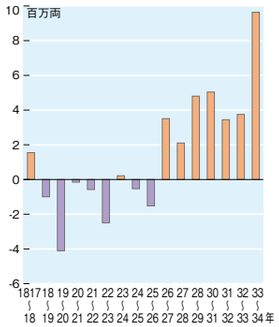
まとめ 石油・電気をエネルギー源とした重化学工業化を第2次産業革命といい，企業の巨大化と金融資本の形成をうながした。やがて海外市場や植民地の獲得をめぐって，列強が世界進出をくわだてる帝国主義の時代を現出した。

▲1 **アヘン戦争**　イギリスの軍船に撃破される清の軍船（ジャンク）。イギリス議会で，清への出兵に関する予算案は271票対262票の僅差で承認された。（東洋文庫蔵）



▲2 **中国のアヘン輸入量**（『図説中国近現代史』）

列強はどのように清への進出をはかったか。清朝や人々はこれにどう対抗したのか。



▲3 **中国の銀の流出額**（『図説中国近現代史』）　国内を流通する銀が減り，その価値が高まったために民衆が納税に使う銅銭の価値が下がった。民衆はより多くの銅銭を納めなくてはならず，実質増税となった。

▶1　1834年に東インド会社の中国貿易独占権が廃止され，民間業者が参入した。

▲4 **林則徐**（1785～1850）　アヘン問題にも積極的に取り組んだが，開戦の責任を取らされ更迭された。

37 清朝の動揺

アヘン戦争

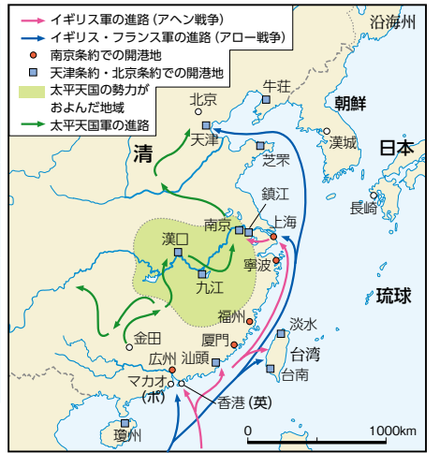
18世紀の清朝は，領土が広がり，人口も爆発的に増えた。しかし，土地不足から農民の貧困化を招き，各地で農民反乱がおきるようになった。18世紀末におきた**白蓮教徒の乱**は，約10年も続き，清朝を苦しめた。 →p.30

このころ，イギリスでは紅茶が庶民の飲料として広まり，中国からの**茶**の輸入が急増した。また，産業革命によって大量生産が可能になった綿布などの工業製品の販売市場を求めたが，広州一港に限った貿易策をとる清朝に対等の貿易を拒否された。こうして，茶の代価としての**銀**がイギリスから中国へ大量に流入した。イギリスはインド産**アヘン**を中国に密輸して銀の一方的流出を防ぐとともに，イギリスの機械製綿織物をインドへ輸出した。このアヘン密輸によって逆に清朝から銀が流出し，中国の経済は混乱した。

1830年代になるとアヘンの流入が激増し，▶1 アヘンの害毒と財政難に直面した清朝は，**林則徐**を広州へ派遣した。彼は密貿易を厳禁し，アヘンを没収して廃棄した。これに対して，イギリスは制限貿易の撤廃の好機と見て，1840年，遠征軍を送って清朝を攻撃した（**アヘン戦争**）。イギリスは勝利し，1842年に清朝と**南京条約**を結んだ。この条約は，清朝に開港を強制したうえに，香港島を割譲させるなど，多くの条項を認めさせた。しかし当時の清朝は，敗戦や条約を重く受け止めなかった。また，貿易量もイギリスが望むほどのびず，アヘン貿易の公認も実現されなかった。

条　約	内　容
南京条約 **（1842年）** 対　英	**①広州・福州・厦門・寧波・上海の開港**　②**香港の割譲** ③**公行の廃止**　④賠償金2100万ドル　⑤対等な外交関係 虎門寨追加条約（1843年） **①片務的最恵国待遇　②治外法権の承認　③関税自主権なし**
天津条約 **（1858年）** 対　英・仏・露・米	**①外国使節の北京常駐**　②中国北方・長江沿岸11港の開港 ③外国人の内地旅行　④**キリスト教の内地布教，信仰の自由** ⑤英・仏への賠償金600万両
北京条約 **（1860年）** 対　英・仏・露	※天津条約の追加条約 ①賠償金の増額　②天津の開港 ③**英へ九竜半島先端部の割譲**　④外交使節の北京常駐 ⑤中国人の海外移住と移民の公認　（以上，対英・仏） ⑥**露へウスリー川以東（沿海州）の割譲**

▲5 **清が各国と結んだ条約**



▶6 **太平天国とアヘン戦争**

そこで，1856年にイギリスは，フランスとともに**アロー戦争**（第2次アヘン戦争）をおこし，清朝と**天津条約**を結んだ。しかし，1859年，条約の批准交換に来た英仏の使節が清朝軍に攻撃されると，再び戦争となった。英仏軍は北京を占領し，離宮の円明園を略奪したうえ破壊した。屈服した清朝は，翌年ロシアの調停で**北京条約**を結び，アヘン貿易も公認した。ようやく外交の重要性を痛感した清朝は，1861年，朝貢とは区別した外交事務を担当する**総理各国事務衙門**を設置した。 →p.16

太平天国

南京条約での多額の賠償金が民衆への増税となるとともに，人口増加による華中・華南の耕地不足も加わり，下層民衆の生活は苦しくなった。1851年，キリスト教の影響を受けた**洪秀全**（ホンシウチュワン）が，「滅満興漢（清朝を滅ぼし，漢族の国家を再興する）」をかかげ，貧農の救済，平等社会の実現を唱えて挙兵した。彼は**太平天国**（1851～64）と号して南京を占領し，ここを都として天京と名づけた。清朝は正規軍だけでは対応できず，漢人官僚や郷紳層▶2が郷里で組織した義勇軍（郷勇），さらに列強の協力で，ようやく太平天国を滅ぼした。

洋務運動

太平天国の鎮圧に活躍した**曾国藩**（ツォンクオファン）（1811～72）・**李鴻章**（リーホンチャン）（1823～1901）らの有力な漢人官僚は，清朝の政策決定に加わることになった。彼らは，西洋式武器の採用・製造による軍事強化をはかった。これを**洋務運動**といい，運動が推進された時期を，年号にちなんで**同治中興**とよぶ。同治帝（位1862～74）の生母**西太后**（1835～1908）は，漢人官僚を積極的に登用して勢威をふるった。しかし，洋務運動は**中体西用**▶3の方針のもと，政治や教育など国の基本的な分野の改革を認めなかったため，近代化は十分な成果を上げることができなかった。

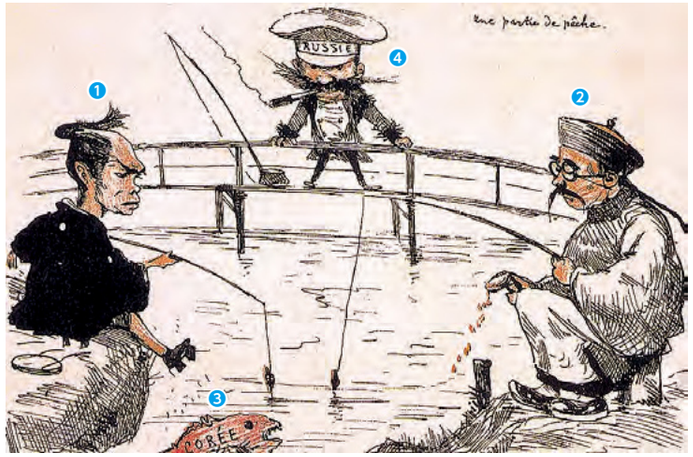
洪秀全（1814～64）
広東省の客家とよばれる集団の出身。科挙を3度受けたが失敗し，失意の中，街でもらった聖書の解説本を読んで，自分がキリストの弟であることを確信した。太平天国では，男女平等や耕地を平等に人々に与えるなど理想社会を構想し，纏足（女児の足指を布で巻き，大きく成長しないようにする風習）や辮髪・アヘン吸飲を禁止した。

▶2　地方社会における実力者。科挙合格者や官僚経験者の中で郷里に隠退した者などを指す。

▶3　儒学を中心とする伝統的な学問や制度を変えず，西洋の技術文明を利用したこと。

まとめ　**イギリスはアヘン戦争に勝利し開港や香港割譲を認めさせ，またフランスとともにアロー戦争をおこして利権を拡大した。漢人地主官僚は，困窮した民衆の太平天国を鎮圧すると，洋務運動を展開し清朝の中興を実現した。**

▲1 日清戦争と下関条約



▲2 日清戦争の風刺画 ❶日本 ❷清 ❸朝鮮 ❹ロシア 日本と清のどちらが魚（朝鮮）を釣り上げるのか，ロシアが見ている。（ビゴー画）

日清・日露戦争を経て，東アジアの情勢はどのように変化したのだろうか。

39 日清・日露戦争と日本のアジア進出

日清戦争

1894年，朝鮮で，東学を信ずる農民が，官吏の腐敗と農民への増税に反対して大反乱（**甲午農民戦争**）をおこした。鎮圧に手を焼いた朝鮮政府は，清朝に援軍の派遣を要請した。日本も居留民保護などを口実に出兵した。反乱はすでに収束していたが，両軍は撤兵せず，**日清戦争**がはじまった。

日本軍は平壌で清軍を破る一方，黄海海戦でも勝利をおさめ，戦場を遼東半島に移した。そして翌95年1月に山東半島に進出して威海衛軍港を占領すると，清朝の北洋艦隊は降伏した。戦争に勝利した日本は，同年，清朝と**下関講和条約**を結んだ。この条約で，日本は朝鮮の独立（清朝の宗主権否定），台湾・澎湖諸島・遼東半島の割譲，賠償金2億両（3億1千万円）[▶1]の支払いなどを清朝に認めさせた。しかし，中国東北部（日本では満州とよんでいた地方）へ南下しようとするロシアが，フランス・ドイツとともに軍事的圧力をかけ，日本への遼東半島割譲をあきらめさせた（**三国干渉**）。また，台湾では漢民族の人々が台湾民主国をつくり，抗日運動を展開した。漢民族や先住民の抵抗は，1915年ごろまでに日本軍によって鎮圧された。

▶1 この金額は，清朝の国家歳入額の約2年分に相当し，日本はこれをもとに軍備拡大を進めた。また，当時の日本の国家歳出額（1年分）は約1億8千万円であった。

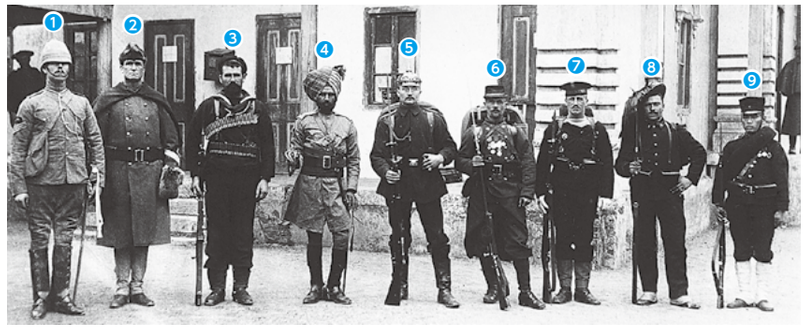
▲3 李鴻章 1870年に直隷総督兼北洋大臣となり，軍備強化をめざして北洋艦隊をつくりあげた（北洋とは直隷・奉天・山東の3省の呼称）。下関講和会議では，清朝側全権大使を務めた。

戊戌の変法と義和団事件

日清戦争の敗北で，康有為（1858〜1927）などの清の知識人は強い危機感をもった。1898年，彼らは光緒帝（位1875〜1908）を動かして日本の近代化にならった政治改革を断行させた（**戊戌の変法**）[▶2]。しかし，西太后ら保守派のクーデタによって光緒帝は監禁され，康有為らは日本に亡命した（**戊戌の政変**）。改革はわずか3か月で失敗に終わった。

▶2 この変法では，官僚の削減，財政の改革，徴兵制の実施，学校の開設，新聞社の創設などをめざした。北京大学の前身もこのとき設立された。

▶4 義和団鎮圧に派遣された8か国連合軍



なぜ9人いるのだろうか。❶〜❾はそれぞれどこの国の兵士だろうか。

同時期，列強の侵略が激しさを増し，列強は中国各地に次々と租借地[▶3]を設けた。このように，外国勢力とキリスト教が中国社会に入ってくると，民衆の間に激しい排外運動がおこった。山東省を中心に勢力を拡大した**義和団**[▶4]は，「**扶清滅洋**（清を助け，西洋を滅ぼす）」を旗印に教会や鉄道を破壊した。1900年，義和団は北京に侵入し，各国の公使館を包囲した。清朝はこれを利用して各国に宣戦布告した。日本とロシアを主力とする8か国連合軍は北京を占領し，清軍と義和団を破った（**義和団事件**）。翌年，清朝は莫大な賠償金の支払い，列強の北京駐兵を認める**北京議定書**（辛丑条約）に調印した。

▶3 他国が長期的に借りて占有・支配する土地のこと。

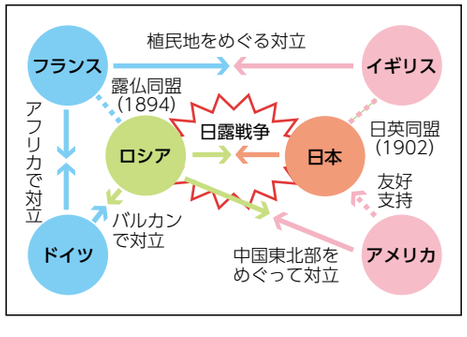
▶4 白蓮教の流れをくむ秘密結社が農村の自衛団と結びつき，義和団と称した。拳術や棒術などの武術に習熟していた。

日露戦争

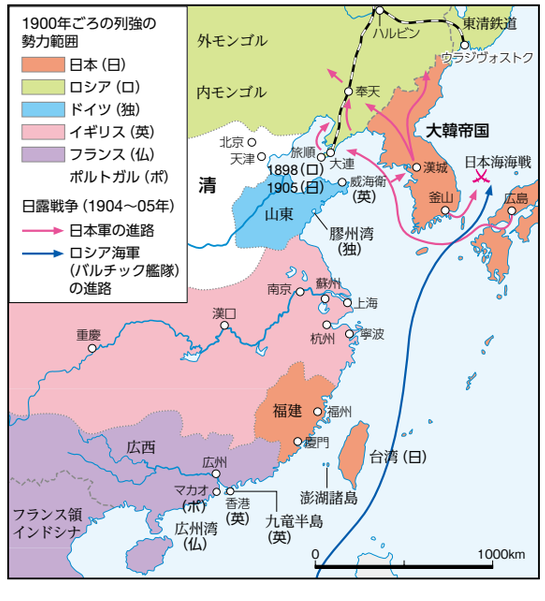
義和団事件以後も，ロシアは兵力を中国東北部から撤退させず，朝鮮半島にせまった。一方，日本は，ロシアの南下を警戒していたイギリスと**日英同盟**（1902）を結んだ。1904年，日本軍は仁川沖と旅順港のロシア艦隊を奇襲して**日露戦争**にふみ切った。その後も日本は戦いを有利に進め，翌05年3月の奉天会戦でも勝利をおさめたが，戦争を継続する力はほとんど残っていなかった。一方，ロシアも，国内で第1次ロシア革命が勃発（→p.152）するなど社会不安が高まり，戦争の継続が困難となっていた。5月，日本海海戦でロシアのバルチック艦隊が壊滅したことを機に，日露両国はアメリカの仲介で**ポーツマス条約**[▶5]を結んだ。

▶5 日本はロシアに，遼東半島南部（関東州）の租借権・東清鉄道支線（のちの南満州鉄道）に関する利権の譲渡と，北緯50度以南の樺太の割譲を認めさせた。

▼5 日露戦争をめぐる国際関係



▼6 中国分割と日露戦争



▲7 **和服の韓国皇太子と伊藤博文**
伊藤は統監府の初代統監。1909年，義兵闘争の指揮官の一人**安重根**に暗殺された。

◀8 **朝鮮総督府**　朝鮮の王宮とその門（手前）の間に建てられた。（ソウル，1995年に解体）

朝鮮の植民地化

朝鮮は1897年，国号を**大韓帝国**（韓国）と改めた。しかし，日本はポーツマス条約で，大韓帝国に対する指導・監督権をロシアに認めさせた。そして，3次にわたる日韓協約により，日本は外交権を奪って統監府を設置し，大韓帝国を保護国化した。大韓帝国内では，武力で日本に抵抗する義兵闘争が広がったが，日本は1910年に**韓国併合**を強行し，京城（漢城から改称，現在のソウル）に**朝鮮総督府**をおいた。

辛亥革命

義和団事件以後，清朝は，科挙の廃止を含む教育改革や，立憲君主体制への移行など，おおむね戊戌の変法と同じ内容の改革をはじめた。一方で，清朝打倒をめざす革命運動もはじまった。**孫文**（スンウェン）は**三民主義**❖をかかげて，東京で中国同盟会を組織し，革命勢力の結集をはかった。

1911年10月，財政難に苦しむ清朝が，鉄道の利権を担保に列強から借金しようとしたことをきっかけに，革命が勃発した（**辛亥革命**）。南方の各省があいついで清朝から独立を宣言し，翌12年1月には南京に共和制の**中華民国**が樹立された。臨時大総統には孫文が就任した。翌月，清朝の実力者**袁世凱**（1859〜1916）が革命側と交渉し，孫文にかわって臨時大総統となることを条件にして，**宣統帝溥儀**（位1908〜12）を退位させた（清朝滅亡）。袁世凱は，北京に首都を移して中華民国の大総統となると，孫文らの共和派を弾圧し，独裁権を得て帝位をねらった。しかし，内外からの反発で挫折し，病没した。こののち，各地に**軍閥**が割拠し，中華民国政府の実権をにぎろうとして，たがいに争うようになった。

◀9 **孫文**（1866〜1925）
台湾の100ドル紙幣。

❖**三民主義**
「民族の独立」（清朝の打倒），「民権の伸張」（君主制を廃止して共和制を打ち立てる），「民生の安定」（貧富の格差拡大の予防）の3つからなる孫文の指導理念。ただし，時代が下るとその内容は変化していった。

十干十二支
「干」は，ここでは幹を，「支」は枝を意味する。十干は甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の，十二支は子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の総称で，各々の語は草木の成長をあらわしている。この干と支を組み合わせると60個の干支（※）ができた。人間の寿命とほとんど同じ数であったため，漢代の中国で年をあらわす方法に用いられ，60歳になると還暦の祝いをする風習もできた。なお，中国の戦国時代のころから，周辺地域に伝える手段として，十二支に覚えやすい動物名をあてよぶようになった。
※歴史的に有名な干支として，壬午・甲申・甲午・戊戌・辛亥などがこの教科書に登場している。

まとめ　日清戦争と義和団事件は，日本の大陸進出を決定づけた。また，朝鮮半島と中国東北部の支配をめぐる日露戦争での日本の勝利は，日本による韓国併合をもたらした。一方，中国では辛亥革命が成功し，清朝が滅亡した。

もっと知りたい世界史

朝鮮・韓国の歴史

朝鮮半島にはどんな国があって，中国や日本とどんな関係があったの？

紀元前後ごろに高句麗が成立し，4世紀中ごろには南部に百済・新羅が成立して三国時代となった。このころ日本は古墳時代で，朝鮮半島から多くの人が日本列島に渡来したことが，古墳などの遺跡や出土物からもうかがえる。7世紀には新羅が半島を統一し，唐の律令制などを採用して国家体制を整えた。一方，滅んだ高句麗の一族は，中国の東北地方に渤海を建てて繁栄した。渤海は貿易を主目的とした使節を日本へさかんに派遣し，北陸地方に来航した。

10世紀，高麗が成立し，中央集権的な政治をおこなったが，13世紀にモンゴルに侵略されて服属した。14世紀末には，倭寇撃退に活躍した李成桂が高麗を倒した。明より承認を受けて朝鮮王朝を建て，漢城を都とした。

16世紀末，豊臣秀吉が朝鮮を侵略するが，民衆の抵抗や李舜臣らの活躍により撃退された。江戸幕府成立後は，対馬の宗氏の仲介で朝鮮と国交を回復した。朝鮮は将軍の代がわりなどの節目に使節（朝鮮通信使）を派遣した。

テレビで韓国のおばあさんがインタビューに上手な日本語で答えていたけど，どうして？

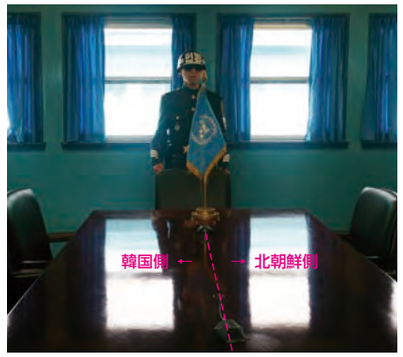
それは，朝鮮が日本の植民地だったからだ。1910年に日本に併合されると，翌年から学校ではほとんどの授業が日本語でおこなわれた。1937年に日中戦争が開戦すると，学校では授業時間以外でも日本語使用が強制された。さらに皇民化政策によって日常生活でも日本語を使う運動が展開され，地域や職場では講習会も開かれるようになった。こうして日本語を理解できる人は急増していったと考えられる。

植民地時代の朝鮮（1937年）　京城（現ソウル）に建てられた伊藤博文の霊廟とそこを訪れた日本人の家族。

世宗（大韓民国の1万ウォン札）　朝鮮王朝の第4代王（在1418〜50）。儒学を奨励し，「訓民正音」（ハングル）の創造や天体観測器の発明など，文化事業に大きな功績を残した。倭寇対策も進め，日本との勘合貿易をおこなった。

朝鮮王朝は朝鮮半島全域を支配したのに，今はなぜ南北に分裂しているの？

1945年，アジア太平洋戦争の終結と同時に朝鮮は日本の植民地支配から脱した（光復）。北にソ連軍が，南にアメリカ軍が進駐すると，東西対立の影響を受け，1948年，南に大韓民国，北に朝鮮民主主義人民共和国が成立した。1950年，南北統一を主張し合う両国間に朝鮮戦争がおきた。1953年に休戦協定が結ばれ，北緯38度線付近を軍事境界線とし，南北の分裂が固定化されたのである。→p.181



板門店の会議場　国際連合の旗（写真中央）が南北の軍事境界線上に立っている。

野球と近代スポーツ

関連ページ ▶ p.125

考えてみよう

野球と出会った日本

野球がいつごろ日本に伝わったのか，またどのような人が野球を楽しんだのか，写真から考えてみよう。

第 1 回全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高校野球選手権大会）**の決勝**
13 回裏，決勝点の場面。（1915 年 8 月。写真提供：朝日新聞社）

今やかの三つのベースに人満ちて
そゞろに胸のうちさわぐかな

ユニフォーム姿の正岡子規とその短歌　子規は，第一高等学校生時代の 1880 年代後半，野球に出会った。（写真：松山市立子規記念博物館蔵）

▶ 野球はいつ誕生したのだろう？

野球はアメリカ合衆国に生まれた近代スポーツである。野球のルールが最初に定められたのは 1845 年のことで，翌年にニューヨークの消防団チームがそのルールにもとづいて最初に野球の試合をおこなったといわれている。1857 年には全国的な組織が設立され，1867 年までに加入チームは 400 をこえるようになった。

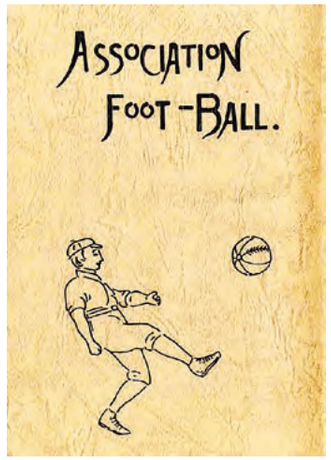
アメリカ野球の特徴は，このころからプロ化が進んだことである。1871 年に最初のプロ野球組織が設立され，プロ野球のリーグ戦がはじまった。野球はアメリカ合衆国の国民的スポーツとなるとともに，プロ球団に雇用（こよう）された選手の待遇（たいぐう）や，黒人選手排斥（はいせき）などをめぐって，社会問題もおきた。

▶ 日本で野球を広めたのはどんな人？

日本に野球を最初に紹介したのは，1872 年，第一大学区第一番中学（現在の東京大学）で教えていたアメリカ人ホレス＝ウィルソンであった。1878 年には，アメリカ合衆国へ留学していた鉄道技師平岡熙（ひらおかひろし）が，開通間もない官営鉄道の運行にたずさわる労働者たちを集めて，「新橋クラブ」という野球チームをつくった。

しかし日本では，アメリカのようにすぐにプロ化が進まなかった。ウィルソンが最初に野球を紹介して以来，野球は「打球（だきゅう）おにごっこ」とよばれて，当時の高等学校（現在の大学に相当）の生徒たちにまず普及したからである。ベースボールに野球という訳語をつけたのは，1894 年，第一高等学校（現在の東京大学）の野球部員だった中馬庚（ちゅうまかなえ）である。高等学校時代から野球好きだった文人正岡子規（まさおかしき）は，野球にまつわる評論や短歌を残した。1896 年には，第一高等学校チームが横浜在留のアメリカ人チームと最初の対抗試合をおこない，これをきっかけに当時の高等学校に野球チームが続々と誕生した。日本の野球の歴史は，学生野球としてはじまり，定着したといってよい。日本で

初期の野球　19 世紀末，アメリカで描かれた絵。



『**アッソシエーションフットボール**』　日本初のサッカーの専門書。東京高等師範学校（現在の筑波大学）フットボール部が編集した。1903 年刊行（複製）。

プロ野球が誕生するのは 1920 年のことだが，昭和期前半まで，プロ野球より学生野球に観衆の注目が集中していた。

▶ 学生スポーツがさかんになったのはなぜ？

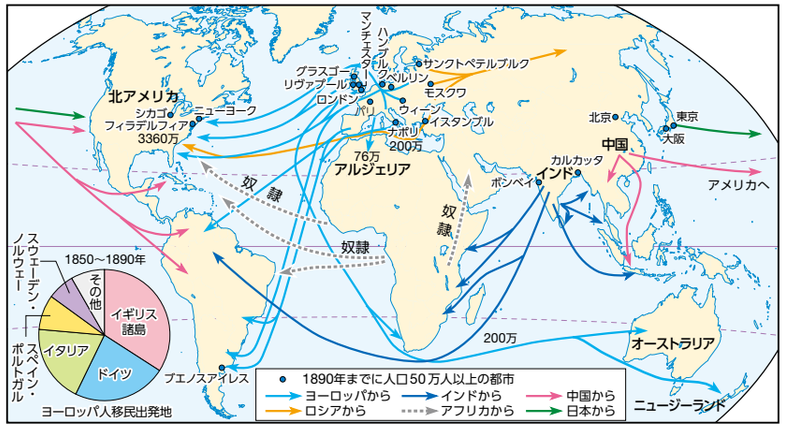
日本の野球は高校生のスポーツとしても定着している。とくに甲子園（こうしえん）の全国大会に見られる高校生の組織的な対抗試合は，野球の母国アメリカにも見られない，日本独自の野球文化である。これは，野球やサッカーをはじめとする近代スポーツが，学校教育を通じて普及したことと関連している。1872 年に当時の文部省が発布（はっぷ）した「学制」で，初等教育に「体術」（体育）科目が導入されて以来，サッカーや野球などの近代スポーツは，体育に必要な戸外運動として推奨（すいしょう）されてきたからである。

多くの近代スポーツ発祥（はっしょう）の地であるイギリスでは，スポーツは若者の成長に欠かせない教育的効能があると考えられていた。日本はこの精神を受け継ぎ，学校教育のはじまりから，近代スポーツを身体の錬成（れんせい）をめざす国民教育に組み入れた。1880 年代には，体育の成果を競う地域の大会が組織された。日本の高校野球文化は，日本が近代スポーツを導入するにあたって，スポーツに人格的向上のための教育的効果を求め，若者のスポーツの組織化を国民教育の手段とした結果だともいえよう。

年	近代スポーツの歴史と日本
1863	イギリス（イングランド）でサッカー協会設立
1871	アメリカで最初のプロ野球リーグ誕生
1872	ホレス＝ウィルソンが野球を日本に紹介
1873	このころサッカーが日本に伝わる
1878	日本にテニスが紹介される
1882	近代スポーツとしての柔道誕生
1891	アメリカでバスケットボール誕生
1895	アメリカでバレーボール誕生
1896	ギリシアのアテネでオリンピック第 1 回大会開催
1899	ラグビーが日本に伝わる
1908	バレーボール，バスケットボールが日本に伝わる
1913	日本で硬式テニスを導入
1917	日本初の駅伝がおこなわれる
1920	日本初のプロ野球チーム誕生

■ 上の年表を参考に，さまざまな近代スポーツの歴史を調べてみよう。

1節 急変する人類社会



◀1 **19世紀までの世界の人口移動**（『資本の時代 2』ほか） 19世紀中にヨーロッパから外に出た人口は，5500万～6000万になると推計される。移動先としてはアメリカ合衆国が最大。オーストラリアへはイギリス人が植民・移民し，1850年に40万あまりだった人口は，1900年には370万までになった。

現代社会はどのようにして形成され，どのような特質をもっているのだろうか。

40 現代社会のはじまり

移民の増大 ―労働力の国際移動

18世紀後半から19世紀末にかけての2次におよぶ産業革命は，欧米諸国のみならず世界にさまざまな緊張と変容をもたらした。ヨーロッパでは工業化と都市化を通じて人口が大幅に増加し，アメリカ大陸やロシアなどから大量の農産物を輸入したが，安価な農産物の流入は農民にとって大きな打撃となった。また都市の労働者も不況が重なって賃金は上がらず，不満をつのらせた。そうした中で，帝国主義的対外進出をあおるナショナリズムや，資本主義体制の変革を求める社会主義，無政府主義の運動などが広まった。

→p.96，124

それと同時に，アメリカ大陸やオーストラリアなど「新大陸」への大規模な**移民**がおこなわれた。アメリカ大陸では，16世紀以来，アフリカの黒人奴隷を大量に受け入れてきた。しかし，19世紀に諸国で奴隷貿易が禁止され，アメリカ合衆国で奴隷制度が廃止されると，黒人奴隷にかわる新たな労働力が必要になった。そこにヨーロッパやアジアからの移民がおしよせたのである。明治期の日本からも，多数の移民がハワイやアメリカ本土に向かった。また，東南アジアにも中国人（華人）やインド人が，ヨーロッパ人植民者の経営するプランテーションや鉱山の労働力として流入した。インド人はアフリカのイギリス植民地にも多数が移住していった。移民の中には，東南アジアの華人のように，商業活動で成功して社会の上層を形成する者もいたが，マイノリティ（少数派）として社会の下層に組み込まれ，差別される者も少なくなかった。

→p.125
→p.94
→p.122

世界の歴史と日本

日本からの移民

日本からは1885年以降，ハワイのサトウキビ農園の契約労働者として，沖縄県民を中心に多数の日本人が海を渡った。その後，米国本土で中国人の移民が制限されると日本人移民が米国に渡ったが，今度は日本人移民への反発が強まったため，新たな移住先としてブラジルやペルーが注目されることになった。

ハワイへ渡った日本人女性（国立国会図書館ウェブサイトより）

▲2 **フォードの工場に並ぶT型車**（1914年） T型車は1908年に850ドルで売り出され，大量生産の結果，16年には360ドルになった。社員の日給は5ドルだったので，自動車は普通の労働者にも手の届く商品となった。

▲3 **電話でサンタクロースと話す女の子**（1884年の挿絵） 電話は，1876年にスコットランド移民のアメリカ人グラハム＝ベルによって発明され，欧米世界に普及していった。

技術革新と世界の一体化

産業革命にはじまる技術革新は，**大量生産**を可能にした。大量生産の商品が人々のくらしを便利にし，生活のスタイルも変えた。大洋をこえて大規模に人が移動できたのも，大型の蒸気船や鉄道が普及した結果である。

19世紀末には，蒸気機関よりも軽量のガソリン＝エンジンやディーゼル＝エンジンが発明され，普及した。ドイツのベンツやダイムラーのガソリン＝エンジンは自動車に取り付けられ，今日の自動車の原型が出現した。アメリカのフォードT型車は大量生産システムでコストを下げ，20世紀初期に自動車を大衆に手の届くものにした。飛行機も二度の大戦を経て改良が進み，軍用だけでなく民間の旅客・貨物輸送に利用されるようになり，人やモノの移動を一段とスピードアップさせた。こうした**輸送革命**は，冷蔵技術の革新とあいまって農産物や食肉を含むモノの移動を地球規模に拡大した。

また，19世紀には**電信・電話**があいついで発明され，通信網の整備が先進諸国にとって不可欠となった。まずイギリス・フランス間のドーヴァー海峡，ついで欧米間の大西洋に海底ケーブルが敷設された。そして，帝国主義の拡大とともに通信網は他の地域にも広がり，世界の一体化をうながした。19世紀末には無線通信も発明され，軍隊と船舶の通信手段として利用されるようになった。

学校教育の普及にともない，19世紀の後半には**新聞・雑誌**の発行部数が増えた。さらに20世紀に**ラジオ**や**映画**が発明されると，またたく間に社会に普及し，そこから流れる情報は人々の意識や行動に大きな影響を与えることになる。

▲4 **モールス電信機** 1837年，アメリカ人モールスが発明。44年にはワシントンとボルティモア間に世界初の電信線が敷設された。1854年に来日したペリーは将軍にモールス電信機を献上した。

▲5 **タイタニック号の沈没** 1895年にマルコーニが発明した無線電信により，1912年のタイタニック号遭難のニュースも欧米各地に伝えられた。

大衆社会・大衆文化

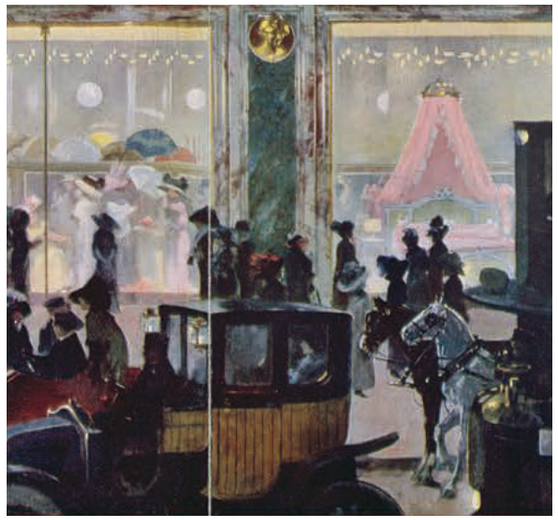
▲6 **フランスの百貨店**　1911年ごろのプランタンの店頭。百貨店は1852年にパリで開店したボン＝マルシェを先頭に次々と誕生し，大量の新商品を陳列して消費を刺激した。

▲7 **新聞の売店とあふれる広告**　1874年，イギリスの駅前。マス＝メディアの発達によって，さまざまな流行や世論が生まれた。

ココ＝シャネル
(1883～1971)
女性が窮屈なコルセットを着用していた20世紀初頭，働く女性のために活動的・機能的なデザインの服を発表し，パリで活躍した。カーディガンタイプの「シャネル＝スーツ」は，今も女性たちに支持され続けている。

▲8 **オフィスで働く“ホワイトカラー”**（1909年，ロンドン）　肉体労働者などが着る作業着（ブルーカラー）に対し，白襟（ホワイトカラー）のシャツを着る事務系職員をこのようによぶ。

◀9 **タイプライターを打つ女性たち**　女性の社会進出も進み，タイピストや電話交換手などが女性の職業として定着した。20世紀初めの様子。



▲10 **ナチスの党大会に集まった熱狂的なドイツ市民**（1938年）
ヒトラー率いるナチスも，大衆の支持を得て選挙という民主的・合法的な制度の中から台頭した。

大衆社会の出現と危機に立つ民主主義

産業の高度化と組織の巨大化にともない，都市住民の中には，従来の資本家や労働者という枠組みではとらえきれない技術者や事務職員などの**ホワイトカラー**が誕生した。彼らは企業の大量生産，大量販売を**大量消費**で支えるとともに，学校教育を通じて政治意識を高め，参政権を獲得して政治の動向を左右するようになった。しかし，労働者のような階級意識や連帯感にとぼしく，均一化した消費生活の中で，新聞・ラジオなどの**マス＝メディア**の影響を受けやすい。こうした集団を**大衆**（マス）とよび，大衆が主役となった社会を**大衆社会**とする見方が登場した。スペインの思想家オルテガ（1883～1955）は，1930年に『大衆の反逆』を著し，大衆化にともなう社会や文化の危機に警鐘を鳴らした。

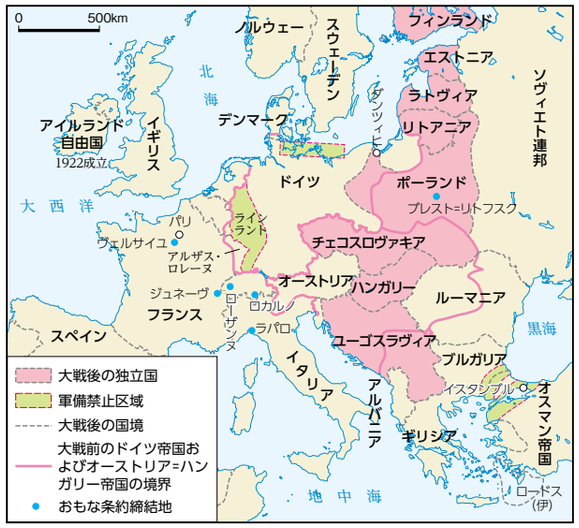
20世紀の世界はファシズム（→p.166），ナチズム，スターリニズムのような**全体主義**を生んだ。しかし，これらの運動はムッソリーニ（→p.157，166），ヒトラー（→p.166），スターリン（→p.153）など，個々の指導者の意志だけで生まれたのではない。消極的であれ積極的であれ，それらの運動を支えた大衆の存在を無視することはできない。大衆は，第一次世界大戦後の民主主義（→p.156）を自ら放棄し，少数者が支配する体制を選択した。平等化が進む中で自己を見失い，与えられた自由から逃げ出して（自由からの逃走）[▶1]，全体主義的な宣伝・扇動・組織化に順応し，独裁者の権威と権力に身をゆだねたのである。なぜ大衆は民主主義よりも少数者の支配を選んだのか。それは当時の社会状況によるのだろうが，決して現代の私たちと無関係ではない。私たちもまた大衆社会に生きているからである。

❖全体主義
個人の自由や利益よりも，国家・社会といった全体の利益の優位を強調する思想および運動を指す。政治学者のフリードリヒ（1901～84）らは，全体主義の指標として，①単一のイデオロギー，②単一の支配政党，③秘密警察，④国家による情報の独占，⑤武器の独占，⑥中央統制経済の6つをあげた。

▶1　この言葉はユダヤ系アメリカ人の精神分析学者フロム（1900～80）の著書（1941年刊）の表題である。彼は大衆のもつ権威主義的性格をナチズムの台頭に即して分析し，批判した。

まとめ　産業革命にはじまる技術革新は大量生産を可能にし，地球規模で労働力や商品が移動するようになった。マス＝メディアの発達ともあいまって世界の一体化をうながし，大衆が主役になる現代社会を出現させた。

▲1 **ヴェルサイユ条約の調印**　ヴェルサイユ宮殿の鏡の間でおこなわれた。



▲2 **第一次世界大戦後のヨーロッパ**

第一次世界大戦後の国際体制はどのようなものだろうか。

43 ヴェルサイユ体制とワシントン体制

ヴェルサイユ体制

1919年1月，第一次世界大戦の戦後処理をするための**パリ講和会議**が開催された。会議の基本原則は，アメリカ大統領**ウィルソン**が1918年に発表した**14か条**とされたが，主導権はイギリスとフランスがにぎり，敗戦国とロシア（ソ連）は参加を認められなかった。6月，ドイツとの間に**ヴェルサイユ条約**が調印され，他の敗戦国と結ばれた諸条約とともに戦後の世界秩序がかたちづくられた（**ヴェルサイユ体制**）。ドイツは，軍備が制限され，海外領土を放棄させられるとともに多額の賠償金を課せられた。▶1 ドイツ・オーストリア＝ハンガリー・ロシア・オスマンの4帝国は解体し，フィンランド・バルト三国・ポーランド・チェコスロヴァキア・ハンガリー・ユーゴスラヴィアの8か国の独立が認められた。また，国際連盟が設立された。これらは，14か条で主張された国際協調と**民族自決**によるものだが，ドイツとソ連は国際連盟への参加を認められず，アジア・アフリカ地域には民族自決は適用されなかった。

ワシントン体制

1921年から22年にかけて，アメリカ大統領ハーディング（→p.157）の提唱で**ワシントン会議**が開催された。米・英・仏・日・伊・中・蘭・ベルギー・ポルトガルの9か国が参加したこの会議により，3つの条約が調印された。**ワシントン海軍軍縮条約**では，米・英・日・仏・伊の主力艦の保有トン数の割合が，5：5：3：1.67：1.67と定められた。米・英・仏・日の間で調印された**四か国条約**では，太平洋地域の領土と権益の相互尊重が定められ，これにより日英同盟は解消された。全参加国が調印した**九か国条約**では，中国の主権・独立の尊重，領土保全，機会均等，門戸開放が定められた。この会議により，**ワシントン体制**とよばれる，東アジア・太平洋地域における国際秩序がかたちづくられたが，これは日本の対外進出をアメリカ・イギリスがおさえようとしたものであった。

▲3 **ウィルソン**（1856～1924）

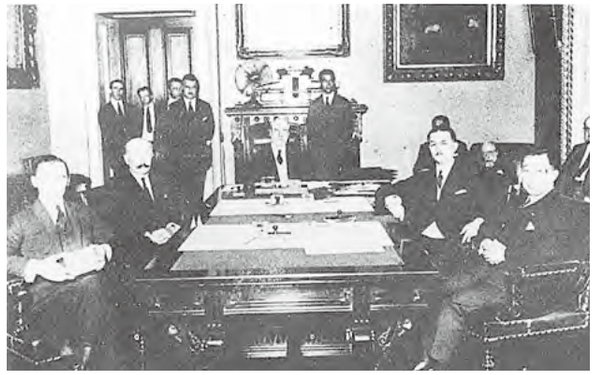
❖ウィルソンの14か条
大戦終結のための原則として発表された。おもな内容は，秘密外交の廃止，海洋の自由，関税障壁の撤廃，軍備縮小，植民地問題の公正な解決，民族自決，国際平和機構の設立など。

▶1　1921年に総額1320億金マルクと決定され，「天文学的金額」と称された。

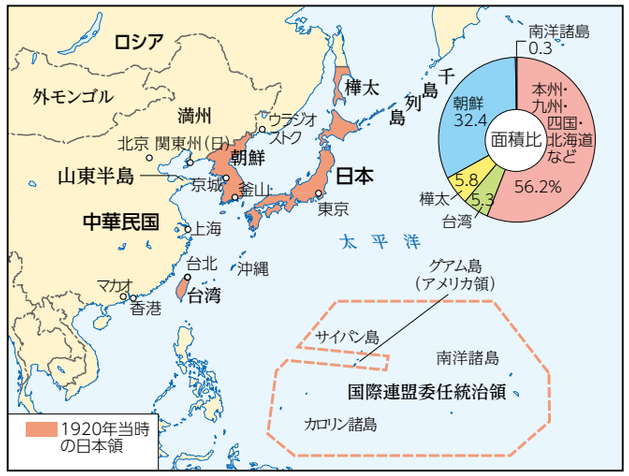
1920年代の国際協調

第一次世界大戦の惨禍に対し，各国の間に国際協調の気運が生まれた。1920年に発足した**国際連盟**には，総会・理事会▶2・連盟事務局がおかれた。また，連盟の提携機関として国際労働機関（ILO），常設国際司法裁判所なども設立された。国際連盟はアメリカの不参加，ドイツ・ソ連の排除や運営上の欠点▶3があったものの，小国間の紛争の解決などで効力を発揮した。

1925年，西ヨーロッパの現状維持を定めた**ロカルノ条約**が結ばれ，28年には**不戦条約**▶4も締結された。また，1930年には米・英・日間で**ロンドン軍縮会議**が開かれ，補助艦の保有比率が10：10：7に定められた。



▲4 **ワシントン海軍軍縮条約**　1923年8月におこなわれた調印式。



◀5 **日本と委任統治領**　1920年，日本はドイツ領であった太平洋の島々のうち，赤道以北の南洋諸島の委任統治を受託した。日本の統治下で，住民の保健衛生面や教育制度，インフラが整備され砂糖生産などがおこなわれた。しかし，その利益の多くは日本人植民者にわたるとともに，日本人植民者が増加して，先住民人口をこえる事態ともなった。

▲6 **“平和の箱舟”から逃げ出すアメリカの上院**　ウィルソンが議会に求めたヴェルサイユ条約の批准と国際連盟への加盟は，上院に反対され実現しなかった（→p.157）。❶ウィルソン　❷平和の箱船　❸上院（1920年の風刺画）

▶2　常任理事国はイギリス・フランス・イタリア・日本の4か国で，1926年にはドイツも加わった。
▶3　全会一致の原則，制裁規定の不明確さなど。
▶4　アメリカ国務長官ケロッグとフランス外相ブリアンが提唱し，15か国が調印して成立した。のちには63か国が参加した。

まとめ　第一次世界大戦後のヨーロッパではヴェルサイユ体制が，アジア・太平洋では中国・太平洋地域の領土保全や軍縮をめざすワシントン体制が成立したが，英米の主導下にドイツやソ連，日本をおさえ込む性格をもっていた。

東京モスクとイブラヒム

関連ページ ▶ p.152, 158

考えてみよう

東京ジャーミィの歴史

下の写真は，東京都内にあるイスラームのモスクである。このモスクにはどのような歴史があるのだろうか。設立にはどのような人がかかわっていたのだろうか。

アブデュルレシト＝イブラヒム（1857～1944）　ロシア出身のタタール人（トルコ系ムスリム）。日本でのイスラームの普及に大きな役割を担った。

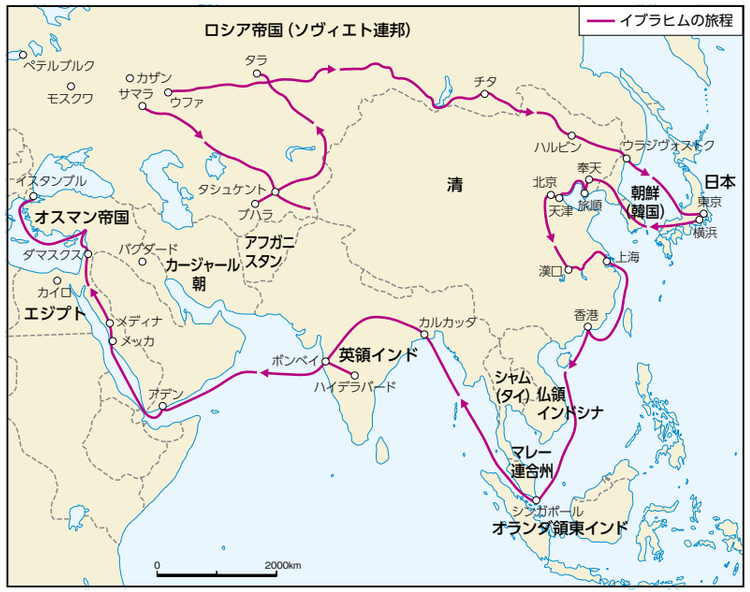
東京モスク　1939（昭和14）年4月，東京モスクを訪問した蒙疆回教団。前列中央がイブラヒム。（早稲田大学図書館蔵）

▶ イブラヒムとはどんな人だろう？

東京の新宿駅から小田急線に乗り代々木上原駅をすぎたころ，右手の車窓にふじ色の美しいドームを連ねたモスクがあらわれる。2000年に完成した東京ジャーミィ（トルコ語で大きなモスクを意味する）である。近年，仕事で来日するムスリムが急増しており，毎週金曜日には多くのムスリムが礼拝に訪れているが，実は東京ジャーミィには前身があった。1986年に老朽化のため取り壊された東京モスクである。

東京モスクの開堂式は，1938年に高名なパン＝イスラーム主義者のイブラヒムが主催し，中東の王子や陸海軍の大将など内外の有力者が出席して盛大におこなわれた。イブラヒムは1944年に亡くなるまで東京モスクのイマーム（導師）を務めたが，彼の最初の来日は第一次世界大戦前にさかのぼる。西シベリアに生まれたタタール人のイブラヒムは，メッカ巡礼後メディナで学んだ。帰国後にロシアのムスリム聖職者を統括する重職を務めたが，帝政ロシアのムスリム政策に反発して辞職し，ジャーナリストに転じた。日露戦争末期からロシア＝ムスリムの政治運動を主導したが，反動が強まった1907年，大旅行に出かけた。中央アジアをめぐったのち，カザンを出発してシベリアを横断し，1909年2月に来日した。日本滞在中は大隈重信や伊藤博文などと会談している。日本の支援を期待するイブラヒムと，犬養毅や頭山満などの大アジア主義者の思惑とが共鳴し，亜細亜議会という結社を結成した。日本をあとにしたイブラヒムが，朝鮮・旅順・北京・上海・シンガポール・カルカッタを経由してボンベイに滞在中，亜細亜議会の紹介を受けた山岡光太郎が訪ねてきた。イブラヒムは山岡の願いに応じてイスラームへの入信を認め，メッカ巡礼に帯同した。山岡は日本人最初のメッカ巡礼者となった。その後，イブラヒムはトルコを中心に活動していた。

20世紀初頭の世界とイブラヒムの大旅行　イブラヒムが1907～09年におこなったユーラシアを周遊する大旅行を地図でたどってみよう。



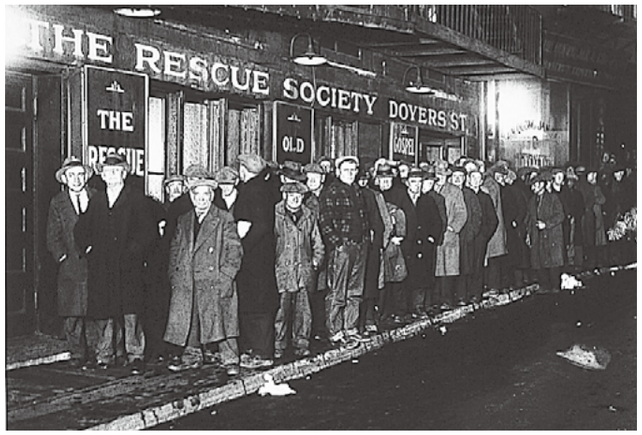
▶ 来日したムスリムの活動を見てみよう

ロシア革命がおきると，ボルシェヴィキの迫害とその後の大飢饉により，カザン州のタタール人が難民として日本にやってきた。東京や神戸には，しだいにムスリムのコミュニティができた。神戸では，以前から居住していた豊かなインド人のムスリム商人が中心となり，1935年に東京モスクより一歩早く神戸モスクを建設した。東京では，クルバンガリを指導者にタタール人の組織化が進み，1925年に東京回教団を設立した。彼らは，トルコ共和国の文字改革で不要になったアラビア文字の活字と印刷機を手に入れ，多くの書籍や新聞，コーランなどを印刷した。教育を重視して回教学校を設立し，隣接地に悲願だった東京モスクを建設した。このころ，日本政府はアジア各地の占領地に住む多数のムスリム対策のために，東京回教団を利用しようとした。指導者をクルバンガリから1933年に再来日した著名人のイブラヒムにかえたのもそうした思惑があった。第二次世界大戦後，東京回教団は東京トルコ人協会と改称し，東京モスクを守り続けて，新来のムスリムのよりどころになった。

1935年に設立された東京回教学校の生徒とクルバンガリ（左端。東京ジャーミィ提供）

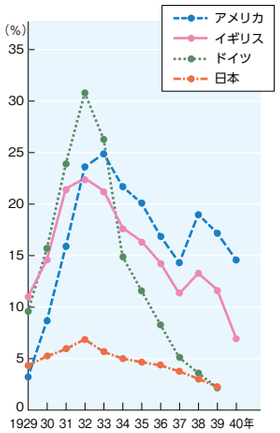
- イブラヒムと東京モスクの関連年表をつくってみよう。
- 日本におけるイスラームの歴史を調べてみよう。

▲1 「暗黒の木曜日」 株価が大暴落したウォール街のニューヨーク証券取引所周辺で混乱する人々。



▲2 食糧の配給を待つ失業者の長い列

世界恐慌に対し，各国はどのように対応したのだろうか。



▲3 各国の失業率の変化（『岩波講座世界歴史27』）

47 世界恐慌

世界恐慌のはじまり アメリカでは，「黄金の20年代」とよばれた繁栄のかげで，農民たちが農産物価格の下落に苦しんでいた。第一次世界大戦中に増産した農産物は，戦後になると輸出先を失い，慢性的な生産過剰になっていた。農業不況の影響で，工業分野の消費にもかげりが見えはじめた。それでも，フーヴァー（1874～1964）大統領が唱えた「永遠の繁栄」（→p.157）という言葉に引きよせられるように，世界の資金はアメリカに集まり，株価は高騰を続けた。

1929年10月24日（「**暗黒の木曜日**」），ニューヨーク株式市場で株価の大暴落がおき，大恐慌がはじまった。銀行や会社の倒産が続出し，街は大量の失業者であふれ，消費がさらに落ち込んで物価が下落する悪循環におちいった。フーヴァー大統領の恐慌対策は後手にまわり，規模も小さかったため効果を発揮できなかった。恐慌前に豊かなアメリカ一国で，自給自足をめざそうとして提案されていた高関税法が1930年に成立した。各国のブロック化（関税引き上げ）を誘発し，諸外国からのアメリカ資本の引きあげも加わって，アメリカの大恐慌は，ソ連を除くほぼ全世界をまき込み，**世界恐慌**となった。

英仏のブロック経済 イギリスに恐慌が波及すると，政府は税収減と失業保険の急増から財政難におちいった。1931年，マクドナルド（1866～1937）首相は挙国一致内閣を組閣し，失業保険などの歳出削減を実施した。同年，金本位制を停止して，金の国外流出を防止した。

このころの恐慌対策は国によって違ったが，自国の経済を守るために一国主義に向かった点では共通していた。アメリカの高関税法にならって，多くの国が関税を引き上げた。イギリスは，自治領と広大な植民地を囲い込んで経済ブロックを形成し，高関税によって諸外国を排除しながら，自国経済の収縮を防いだ（ポンド＝ブロック）。同様に多くの植民地をもつフランスも**ブロック経済**を採用し，フラン＝ブロックを形成した。こうして世界の貿易は縮小し，経済はさらに悪化した。

アメリカのニューディール 1931年，アメリカのフーヴァー大統領は，ドイツを救済するためにフーヴァー＝モラトリアム▶1を発したが，恐慌の猛威を止めることはできなかった。33年に大統領に就任したフランクリン＝ローズヴェルトは，**ニューディール**とよばれた一連の改革法案を成立させた。その根幹をなす法案は，減反によって農家を安定させる農業調整法（AAA）と，企業の生産調整と労働者の保護・救済をはかる全国産業復興法（NIRA）であった。テネシー川流域開発公社（TVA）などの公共事業をおこして，需要の創出と安価な電力の供給をはかった。金本位制を一時停止して，通貨ドルの切り下げも実施した。これらによってアメリカ経済は底を脱したが，35年に最高裁がNIRAに違憲判決を下した。▶2 ローズヴェルト大統領は，労働組合や社会保障制度を強化したワグナー法を成立させて対抗した。37年，景気がまた下降しはじめると，公共事業などの歳出を増やして有効需要を創出し，景気を回復させた。▶3

資源にとぼしく経済基盤の弱いドイツや日本では，経済恐慌が政治危機を誘発し，対外侵略に活路を求めようとする政治勢力の台頭を招いた。すでにファシスト党が政権を獲得していたイタリア（→p.157）は，急速に対外侵略への傾斜を強めた。こうして，1920年代に盛り上がった国際協調の気運（→p.155）は吹き飛び，再び世界大戦への道を進みはじめた。

まとめ 英仏はブロック経済と高関税政策で，またアメリカはニューディール政策で恐慌に対応した。一方，ドイツや日本など経済基盤の弱い国では，対外侵略に活路を求めようとする勢力が台頭した。

世界の歴史と日本
安達峰一郎

新渡戸稲造をして「日本の宝」といわせたフランス語の鮮やかな弁舌と，豊富な国際法の知識で国際的に評価の高かった安達峰一郎は，常設国際司法裁判所の裁判長に選ばれた。しかし，世界恐慌から戦争をも辞さない一国主義が台頭し，平和の府の長としての心労と激務から病に落ち急死した。1934年，現職の常設国際司法裁判所裁判官としてハーグで客死した安達の死を悼んで，オランダは国葬の礼で讃えた。

国際司法裁判所の裁判官席に座る安達峰一郎（1869～1934）

フランクリン＝ローズヴェルト（1882～1945）

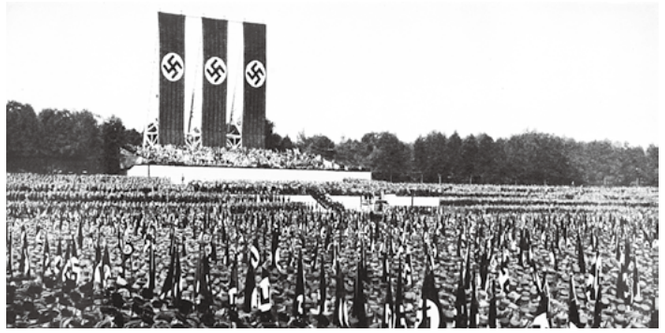
ポリオを克服した車椅子の大統領だった。ラジオ放送を通じて，国民にわかりやすく政策を語る「炉辺談話」で人気を博した。第二次世界大戦中に，史上初めて米大統領に3選され，4選もしたが，1945年に急死した。戦後，米大統領は2選までに制限された。

▲4 スターリング＝ポンドのコイン イギリスの通貨ポンドのコインは，高純度の銀で鋳造され，純度を誇ってスターリング＝ポンドとよばれた。ポンド＝ブロックはスターリング＝ブロックともよばれる。写真は1928年発行の1シリングコイン。

▶1 ドイツの賠償金と戦債の1年間支払い停止を命じたもの。

▶2 この法にある諸規制が，憲法が認めた連邦政府の権限をこえるものと判断された。

▶3 このような経済政策は，修正資本主義とよばれ，イギリスの経済学者ケインズ（1833～1946）により理論化された。



▲1 ナチスの集会（1935年，ニュルンベルク）

▲2 ムッソリーニ（左）とヒトラー

48 ファシズムの台頭

ドイツやイタリアはどのように社会的危機をのりこえようとし，各国はそれにどのように対応したのだろうか。

❖ファシズム
ファシスト党の思想に由来する，国家主義的，全体主義的な政治形態を指す。反資本主義，反共産主義を唱え，大衆・中間層を引きつけた。

アドルフ＝ヒトラー
（1889～1945）
オーストリア出身。美術学校進学をめざしたが受験に失敗。第一次世界大戦に参加して負傷した。戦後，ナチスを率いてミュンヘン一揆をおこしたが，失敗してとらえられた。獄中で『わが闘争』を著して党の進む道を示した。

▶1 ナチ（単数）やナチス（複数）は，反ヒトラー派がこの党の通称名に用いた蔑称。日本では公式の略称として，単数・複数を問わずナチスを用いている。

ファシズムの台頭

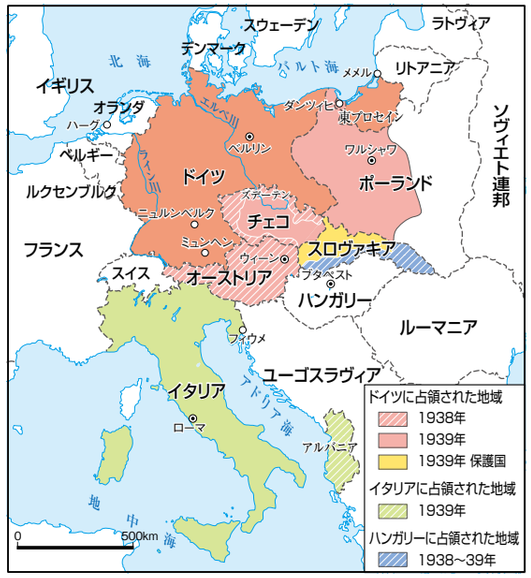
第一次世界大戦後，ヨーロッパ諸国は政治的，経済的に苦しい立場におかれた。また，東ヨーロッパ・バルカン地域における多くの新興国の成立（→p.154）やソ連の誕生（→p.153）は，ヨーロッパ人自身に時代に応じた変革の必要性を意識させることになった。そのような社会的危機の中から**ファシズム**❖という議会制民主主義を否定する独裁政治が生まれた。

イタリア

ファシズムは，まず経済的混乱に見舞われたイタリアに出現した。ムッソリーニの率いるファシスト党は，1922年に政権を獲得すると，ファシズム大評議会に権力を集中させて**一党独裁体制**を確立した（→p.157）。対外的には，フィウメを併合したのち，アルバニアを保護国とした。35年にはエチオピアを侵略して，翌年には併合した。36年には**ベルリン＝ローマ枢軸**の成立を宣言し，翌年，**日独伊防共協定**が成立した。

ドイツ

ドイツ国民は，多額の賠償金支払いなど，ヴェルサイユ体制に対して強い不満を抱いていた。大戦後の経済混乱から立ち直ったものの，世界恐慌でアメリカ資本が引きあげると，経済は深刻な打撃を受けて失業者が激増した。そのころ，ヒトラーが率いる**ナチス**▶1（**国民社会主義ドイツ労働者党**）が，たくみな大衆宣伝によって1932年の国会選挙で第一党に躍進した。33年，ヒトラーは共産党などの勢力拡大を恐れる軍部や大資本家の支持を受けて首相となった。そして，同年に国会議事堂放火事件を口実に共産党を弾圧して**全権委任法**を成立させ，他の政党を禁止して一党独裁体制を樹立した。その後，公共事業や軍需施設の拡大により失業者を減少させる一方，**ユダヤ人の迫害**をはじめた。また，対外的には33年に国際連盟を脱退，35年には**再軍備宣言**，翌年に非武装地帯の**ラインラント**に軍隊を進駐させるなど，ヴェルサイユ体制打破への道を突き進んだ。

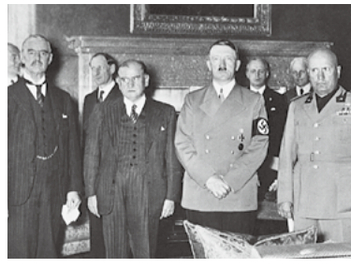


▲3 ドイツとイタリアの対外進出

年	イタリアとドイツの動き	
	伊・ファシスト党	独・ナチス
1922	ローマ進軍　→政権獲得	
1924	フィウメ併合	
1926	アルバニアを保護国化	
1929	世界恐慌	
1932		国会選挙で第1党となる
1933		ヒトラー，首相に就任 全権委任法成立　国際連盟脱退
1934		ヒトラー，総統に就任
1935	エチオピア侵略	再軍備宣言
1936	エチオピア併合	ラインラント非武装地帯に進駐
	ベルリン＝ローマ枢軸成立	
1937	日独伊防共協定	
	国際連盟脱退	
1938		オーストリア併合　ミュンヘン会談→ズデーテン地方獲得
1939	アルバニア併合	チェコ領有，スロヴァキア保護国化

スペイン内戦

1936年，フランスやスペインでは，台頭するファシズム勢力に対抗するため，社会党や共産党などが協力して人民戦線政府を樹立した。しかしスペインでは，保守派のフランコ（1892～1975）将軍が反乱をおこし，内戦になった。英仏は戦争拡大を恐れて不干渉政策をとったが，独伊の枢軸国は公然とフランコ軍を支援した。ソ連と国際義勇軍が人民戦線政府を支援したが，英仏が不干渉政策を続けたため，39年，**スペイン内戦**はフランコ軍が勝利した。

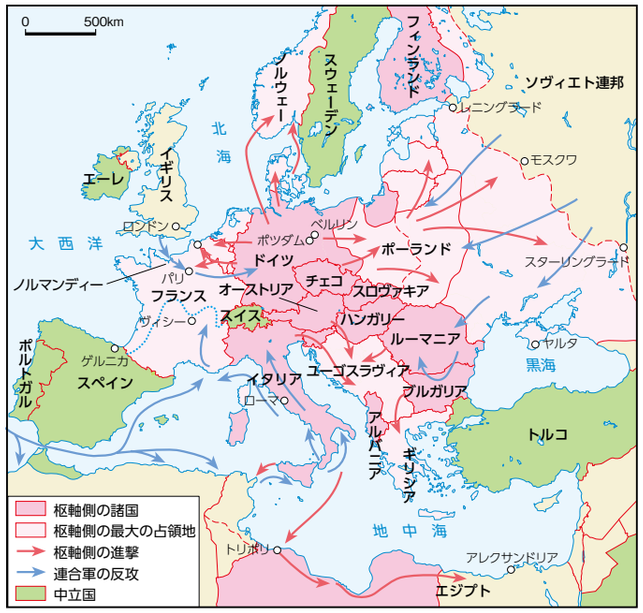


▲4 ミュンヘン会談の各国首脳
左からチェンバレン英首相，ダラディエ仏首相，ヒトラー独総統，ムッソリーニ伊首相。（1938年9月）

ドイツの膨張とイギリスの宥和政策

1938年，ドイツは，ヴェルサイユ条約で定められた国境の変更にとりかかった。まず，ドイツ系のオーストリアを併合し，続いてチェコスロヴァキアに対してドイツ系住民が多いズデーテン地方の割譲を要求した。緊張が高まる中，9月に英仏独伊の首脳による**ミュンヘン会談**がおこなわれた。戦争回避を優先し，**宥和政策**をとるネヴィル＝チェンバレン（1869～1940）英首相は，「最後の要求」だとするヒトラーを信じ，ズデーテン併合を認めた。しかし，ドイツの膨張は止まらず，39年3月，ドイツはチェコスロヴァキアを解体してチェコを領有し，スロヴァキアを保護国とした。さらに，ポーランドも圧迫した。4月にはイタリアもアルバニアを併合した。一方，ドイツの脅威にさらされたソ連は，英仏との協力を模索したが交渉は長引いた。ドイツは東西からの攻撃を一時的に避けるため，ソ連と**独ソ不可侵条約**を結び，ポーランド侵攻の準備を整えた。

まとめ
ドイツやイタリアはいずれも領土の拡大など軍事力による現状打破をめざした。これに英仏は宥和政策で対応したため，英仏への不信を強めたソ連はドイツに接近し独ソ不可侵条約が結ばれた。



▲1 **第二次世界大戦中のヨーロッパ**　ペタン首相の南仏政府は，首都の名前からヴィシー政府とよばれた。

▲2 **ポーランドに侵攻するドイツ軍**

▲3 **ド＝ゴール**（1890～1970）　ラジオ放送でレジスタンスをよびかける自由フランスのド＝ゴール。

第二次世界大戦はどのようにはじまり拡大していったのだろうか。各国の関係にも注目しよう。

49 第二次世界大戦の勃発―ヨーロッパ戦線

第二次世界大戦の勃発

1939年9月1日，ドイツ軍がポーランドに侵攻すると，3日には英仏がドイツに宣戦し，**第二次世界大戦**がはじまった。英仏軍は宣戦布告をしたものの，戦争体制が整わず，ドイツ軍が一方的に進撃した。ソ連は英仏対ドイツの戦争に中立を宣言したが，9月17日，東側からポーランドに侵攻した。ポーランドは1か月足らずで独ソ両国に分割されて消滅した。ソ連は，ドイツとの秘密協定を背景に，バルト三国を占領し，フィンランドにも侵攻した。40年，ソ連はルーマニアからベッサラビアを獲得し，バルト三国を併合した。

1940年5月，イギリスの首相は**ネヴィル＝チェンバレン**から**チャーチル**（1874～1965）に交代したが，ドイツ軍の攻勢は続いた。6月，パリを占領されたフランス政府は**ペタン**（1856～1951）が首相となり，ドイツに降伏した。ドイツはフランス北部を占領し，ドイツに協力的なペタン首相にはヴィシー

→p.180

カティンの森で見つかった大量の死体（1943年）

カティンの森事件

ポーランドの東部を占領したソ連は，将来の反ソ独立運動の芽を断つために，知識人でもあった将校1万5千名弱と，旧体制関係者7千名強を射殺し，カティンなどに埋めた。のちに独ソの宣伝戦で有名になったカティン事件である。犠牲になったポーランド将校を父にもつアンジェイ＝ワイダ監督の映画「カティンの森」は，事件後のポーランドが歩んだ苦難をまじえながら戦争や権力による暴力を描いている。2010年，この事件の追悼式に向かう飛行機が墜落し，ポーランド大統領らが死亡した。

▲4 **ドイツ軍の空爆を受けたロンドンの街**（1940年9月）

世界の歴史と日本
杉原千畝「命のビザ」

杉原千畝（1900～86）

ドイツ軍の侵攻直前の1940年9月，リトアニアの在カウナス日本領事代理・杉原千畝は，迫害を逃れてきたユダヤ人に対して，日本の外務省が許可しなかったにもかかわらず，日本通過ビザを独断で発行した。領事館が閉鎖され出国する列車の中でも手書きでビザを発行し続けた。このビザによってソ連を通過して，日本からアメリカに脱出し，命を救われたユダヤ人は6千人以上といわれる。

を首都として南部の統治を認めた。降伏に反対した**ド＝ゴール**将軍は，亡命先のロンドンから**レジスタンス**（抵抗運動）をよびかけた。

6月，ドイツの優勢が決定的になると，様子を見ていたイタリアが参戦した。**日独伊三国同盟**を結んだ9月，イタリア軍は北アフリカに侵攻し，10月にはギリシアにも侵攻した。ところがいずれも苦戦し，ドイツ軍の支援を受けることになった。ドイツは，この機会にバルカン半島からソ連の影響力を排除しようとしてルーマニアに軍を進め，ハンガリー，ルーマニア，ブルガリアを同盟国に引き入れた。

この間ドイツ国内では，ユダヤ人やロマ，[▶1] 障害のある人たちに対する迫害が本格化した。かねてより**ヒトラー**が主張していた差別政策だったが，ドイツ人の人口増と生存圏確保のためとして，ソ連を含む東方のスラヴ人地域に領土を拡大する計画も表明していた。

▶1　通称ジプシーは蔑称でもあるので，現在は自称であるロマを用いる。芸能や工芸，行商，占いなどを生業として定住せずに移動生活をした人々。ユダヤ人とともにナチスによる絶滅政策の対象とされ，虐殺された。

独ソ戦の開始と大西洋憲章

ドイツ軍はイギリス上陸をめざして，1940年夏からロンドン空爆を強化した。41年3月，アメリカ合衆国は孤軍奮闘しているイギリスを救うために中立を捨て，**武器貸与法**を制定してイギリス支援にふみ切った。

ドイツ軍の圧倒的優勢を前に，ソ連はドイツ軍の攻撃が自国に向けられることを警戒しはじめ，背後の安全を固めるため，日本と接近した。1941年6月，ドイツは独ソ不可侵条約を破ってソ連に侵攻し，破竹の勢いでモスクワにせまっていった。7月，イギリスが英ソ相互援助協定を結び，アメリカも武器貸与法をソ連に適用して，実質的な米英ソの同盟が成立した。8月，**フランクリン＝ローズヴェルト**米大統領とチャーチル英首相は**大西洋会談**をおこない，ファシズムとの対決と戦後の平和構想をうたった**大西洋憲章**を発表した。

▲5 **大西洋会談**　ローズヴェルト米大統領（前列左）とチャーチル英首相（同右）。

まとめ　ドイツのポーランド侵攻をきっかけに第二次世界大戦が勃発した。ドイツの攻勢の前にフランスが降伏，イギリスも苦戦するとアメリカがイギリス支援をはじめた。さらに独ソ戦にともない米英ソの同盟関係が成立した。

▲1 **インティファーダ**　イスラエル占領地でおこったパレスチナ人による民衆蜂起。パレスチナの人々がイスラエル軍に向かって石を投げている。インティファーダは，アラビア語で「蜂起」の意味。(1988 年，ヨルダン川西岸地区)

▲2 **イラクとトルコの国境をこえるクルド人難民** (1991 年)

西洋列強の帝国主義支配や米ソ冷戦，イスラーム復興運動が諸民族の国家形成におよぼした問題を考えてみよう。

61 西アジア・アフリカの諸課題

パレスチナ問題

西洋列強の帝国主義支配の影響を受けた西アジアやアフリカの国々では，国民国家としての成熟に多くの困難がともなった。さまざまな紛争がおこり，国家間の関係も不安定な中で，和解と共存の構築が重要な課題となっている。

パレスチナでは，第 3 次中東戦争で全土がイスラエルの占領下におかれ，事態がさらに深刻化した。パレスチナ全体の解放をめざしてきたPLOも，「土地と和平の交換」[1]を受け入れて地域を限定した独立国家樹立をめざさざるを得なくなった。1987 年，インティファーダをきっかけに和平への機運が生まれ，93 年にはイスラエルとPLOが**パレスチナ暫定自治協定**[2]を結び，翌年，自治政府が成立した。しかし，イスラエルが占領地での入植活動を続け，パレスチナ側でも和平の進め方に批判的な勢力が影響を強める中，和平への道はいきづまった。

→p.187

▶ 1　第 3 次中東戦争の終結を求める国連安全保障理事会決議 242 号で打ち出された原則。イスラエルが占領地から撤退するかわりに，周辺アラブ諸国がイスラエルの生存を認めるとするもの。のちの中東和平交渉の基盤となった。

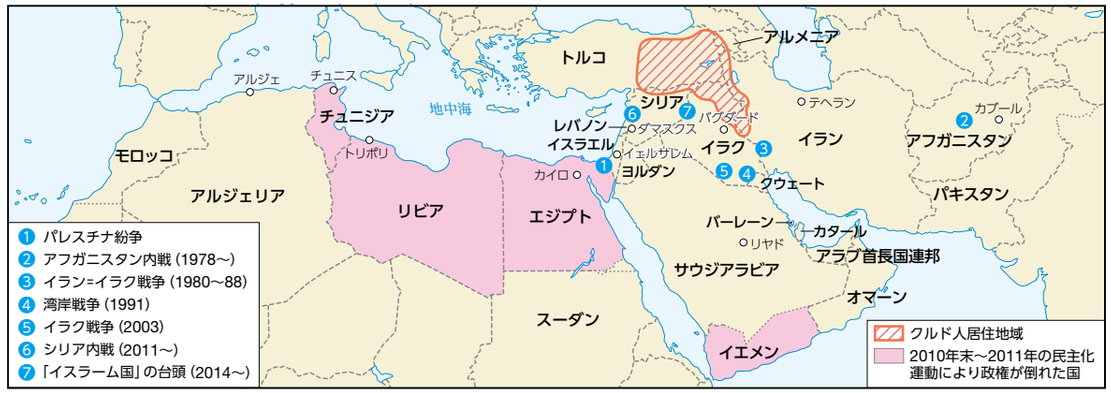
▶ 2　イスラエルの占領地域の一部でのパレスチナ暫定政府による自治の実施を認めた協定。

クルド人問題

アラブ人が多数を占めるイラクでは，トルコやイランとの境界に住む**クルド人**[❖]が 1960 年代から本格的な自治要求運動を展開し，70 年にはイラク政府との間で自治合意にいたった。しかし，自治区の範囲，とくに油田地帯の扱いをめぐって両者の折り合いがつかなかった。イラン＝イラク戦争末期の 88 年には，イラクのフセイン(1937〜2006)大統領が化学兵器によってクルド人の動きをおさえ込もうとし，多数の犠牲者を生んだ。湾岸戦争でフセイン政権が弱体化した 91 年 3 月，クルド人がいっせいに蜂起したが，政府軍に鎮圧され，多くの難民が周辺諸国に流出した。その後，クルド人地域にはアメリカの保護のもと自治政府が成立し，独立を求める動きもおこっている。

→p.187

❖クルド人
トルコ，イラン，イラク，シリアにまたがってくらす人々。クルド語という独自の言語をもち，その居住地域をクルディスタンとよぶ。それぞれの国において自治や民族的な権利の承認を要求している。



▲3 **西アジアと北アフリカの政治的混乱**　2011 年以来，内戦の続くシリアから周辺諸国に多くの難民が流出し，一部はヨーロッパに向かった。リビア沿岸からはアフリカ各地の難民が地中海を経てヨーロッパをめざすようになった。

アフガニスタン内戦

アフガニスタンでは，米ソ冷戦が引き金となって 1970 年代末から内戦がはじまった。78 年に誕生した左派政権の支援を口実にソ連軍が侵攻すると，アメリカの援助を受けたムジャーヒディーン[3]が反政府闘争を展開し，内戦となった。この間，多くの難民が周辺諸国や欧米へと逃れた。ソ連軍が撤退すると，ターリバーン[4]が厳格な宗教政策をかかげ 96 年からアフガニスタンの大部分を支配した。しかしターリバーン政権も，2001 年，9.11 事件の首謀者をかくまっているとしてアメリカの武力攻撃を受け，崩壊した。同年，国際社会の支援を得て成立したカルザイ(1957〜)政権は，内戦を終結させ，国民の和解という困難な課題に取り組むことになった。しかし，その後，ターリバーンが再び勢力を取り戻すなど，現在も混乱は続いている。

→p.192

▶ 3　イスラーム戦士の意。人民民主党政権に対する反政府ゲリラ組織に対する総称。

▶ 4　ターリブ（神学生）の複数形。アフガニスタン内戦で台頭したイスラーム神学生を中心とする武装勢力。

イラク問題とアメリカ

冷戦終結後，中東地域へのアメリカの軍事的関与が拡大したが，発端はイラン＝イラク戦争にあった。戦争の間，イランの勝利を阻もうとソ連や西側先進国がさかんにイラクを支援したため，イラクは軍事大国へと変貌した。90 年，強大な軍事力を背景にイラクがクウェートに侵攻すると，翌年，米軍主導の多国籍軍がイラクに進撃して**湾岸戦争**がはじまり，まもなくイラクが降伏するかたちで終結した。この事件は，それまで中東への直接的な軍事行動を控えていたアメリカの対中東戦略の大きな転換となった。9.11 事件後は，自国の安全保障を脅かすものに対しては先制攻撃も辞さないとの姿勢を明確にした。2003 年には，イラクが大量破壊兵器を保持しているとしてイギリスとともに**イラク戦争**をおこし，フセイン政権を打倒した。戦争で多くの人々が犠牲になったうえ，政権崩壊がイラクの政治的混乱と極度の治安悪化を引きおこし，新政権が発足したあとも治安の回復は遅れている。

年	西アジアの動き
1967	第 3 次中東戦争
1971	アラブ首長国連邦成立
1973	第 4 次中東戦争
1979	ソ連，アフガニスタンに侵攻 イラン＝イスラーム革命
1980	イラン＝イラク戦争勃発
1987	パレスチナでインティファーダおこる
1989	ソ連，アフガニスタン撤退
1990	イラク，クウェートに侵攻
1991	湾岸戦争
1993	パレスチナ暫定自治協定締結
2001	米で 9.11 事件 米，アフガニスタンを攻撃
2003	イラク戦争
2005	イスラエル軍，ガザ地区から撤退
2011	北アフリカ・西アジア諸国で民主化運動拡大
2012	国連総会で「パレスチナは国家」決議採択

▲4 **イラン＝イスラーム革命**　ホメイニ師の肖像をかかげてデモをおこなう人々。(1979年，テヘラン)

▲5 **エジプトの反政府運動**　民衆による運動をきっかけに約30年続いたムバーラク大統領の独裁政権が倒れた。大統領の退陣を喜ぶ市民たち。(2011年2月，カイロ)

❖イスラーム復興運動

イスラーム復興運動は，技術の発展など現代文明そのものを否定しようとするものは少なく，イスラーム的な倫理観によりながら，より望ましい社会を築くことをめざすものであった。教育，医療，福祉といった草の根の奉仕活動に従事するものから，議会への進出を通じて政治や社会を徐々に変えていこうとするもの，さらには直接的な暴力によって権力獲得をめざすものまで，さまざまな形をとった。

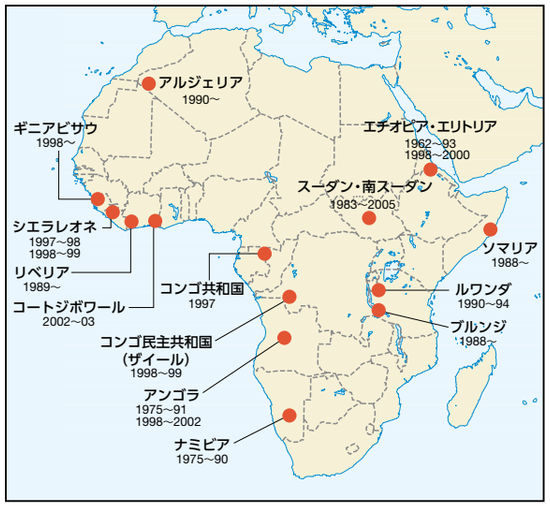
▶5　男性はあごひげをはやし，女性はヴェールをまとうといった現象が見られるようになった。

イスラーム復興とイスラーム主義―公正な社会を求めて

1960年代以降，ムスリムが多数を占める国々では，性急な経済開発や独裁的な支配体制に起因する諸問題を，公正や相互扶助といったイスラームの価値観によって解決しようとする動きが❖あらわれた。

運動の源流は，イスラーム世界の大半が西洋列強の従属下におかれつつあった19世紀後半にさかのぼる。アフガーニー→p.129は，イスラーム世界の人々が連帯することで帝国主義や植民地主義に抵抗することを唱えた。エジプトでは，1928年，ムスリム同胞団が結成され，教育を通じて人々をイスラームの社会的実践へと導くことをめざす運動がはじまった。

20世紀後半，政府が国民の不満に十分に対応できない中で，イスラーム復興の動きは広がった。▶5 イスラーム主義運動も，人々の共感を得て社会変革へのうねりとなっていった。イランでは，1960年代から国王が近代化をおし進めたが，独裁的な政治手法や貧富の差の拡大などへの不満から国王批判が高まり，79年にはパフレヴィー朝→p.159が打倒された。こうしてホメイニ師(1902～89)を指導者とする**イラン＝イスラーム共和国**が成立し，国家と社会のイスラーム化をはかるようになった（**イラン＝イスラーム革命**）。トルコでは，政教分離の原則にもとづいて世俗化政策が進められてきたが，1960年代からイスラームへの回帰→p.158をめざす運動があらわれた。国家に弾圧されつつも，議会で勢力をのばし，90年代以降は政権をにぎるまでに成長した。パレスチナでも，第3次中東戦争敗北で，アラブ＝ナショナリズムにかわってイスラーム主義運動が力を得た。なかでもハマース（イスラーム抵抗運動）は，病院や学校の建設などの地道な奉仕活動を展開して支持を広げ，2006年にはパレスチナ自治区での選挙で勝利した。



▲6 **アフリカの地域紛争・民族紛争**

アパルトヘイトとマンデラ

マンデラ
(1918～2013)

南アフリカでは，白人の優越性を確保する人種隔離政策「アパルトヘイト」が1948年以降，法整備とともに本格的におこなわれるようになった。黒人の抵抗運動に加え，国連の非難決議や経済制裁など国際的な圧力もあったが，南アフリカが多くの希少金属を生産していたこともあって効果はあがらなかった。

抵抗運動の指導者だったマンデラは，1964年に終身刑とされたが，抵抗運動が高まる中，1990年にようやく釈放された。その後，当時の大統領とともにアパルトヘイトの撤廃を進め，94年にはすべての人種が参加した総選挙の結果大統領に就任した。

▲7 **黒人用と白人用で分けられた公共トイレ**（1974年）　南アフリカでは，白人支配のもとで黒人に対する**アパルトヘイト**が実施された。1991年廃止。

民衆運動のうねりと内戦

2010年末よりアラブ世界各地ではじまった反政府デモは，長期独裁政権をあいついで打倒した。2010年12月のチュニジアにはじまり，2011年2月にはエジプトで，8月にはリビアで独裁政権が倒れた。しかし，「革命」後の安定した政権づくりは難航し，シリアのように民主化要求運動をきっかけに内戦にいたるところもある。近年では，シリアやイラクなどの政情不安に乗じてイスラーム過激派が台頭し，一部地域を支配下におくような動きも示している。

アフリカ―内戦から安定へ

アフリカでも，独立後の道は平坦→p.182ではなかった。新興諸国は列強の分割による境界線を引き継いでおり，国民意識が希薄であった。かつて植民地支配当局が民族間の対立をあおったこともあり，独立後も民族対立・内戦に苦しんだ。権力者が国家を私物化し，出身民族へ利益を誘導したことで法や秩序が失われる場合もあった。干ばつによる飢饉が内戦や民族対立とあいまって，多数の死者や難民を生み出した。冷戦や旧宗主国の介入も内戦を深刻化させた。1975年の独立直前にはじまった**アンゴラ内戦**は，米ソの介入によって長期化し，2002年の終結まで多数の被害者を生んだ。**ルワンダ**でも，フツ人とツチ人の対立が内戦に発展した。

各地で紛争があいつぐ中，2002年，アフリカ統一機構が**アフリカ連合**（**AU**）へと改組され，紛争解決や経済発展に積極的に関与する姿勢を示した。しかし，ソマリアなどでは依然として内戦が続いている。他方，アフリカはレアメタルなど希少資源の宝庫でもあり，近年，欧米諸国や中国・日本なども積極的に進出をはかっている。

▲8 **ルワンダの難民**　1994年，フツ人を中心とする政府が，自らの腐敗や経済危機への国民の不満をかわすため，危機の責任をツチ人に転嫁し，ツチ人住民に対する虐殺がおこった。内戦により大量の難民が生まれた。

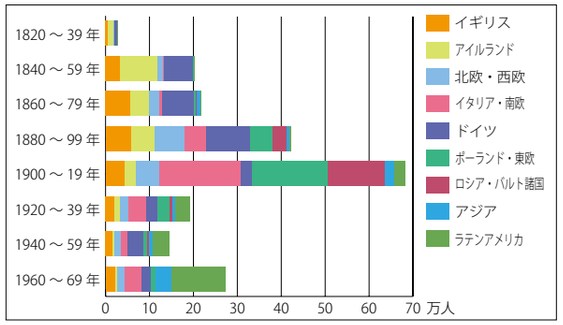
課題学習

持続可能な社会に向けて ③

■ テーマ集 1

❶ 移民問題

keyword : 19 世紀後半～　人口／労働力



アメリカ合衆国への出身地別の年平均移民数の推移
（『近代国際経済要覧』）

「移民の世紀」とまでいわれる 19 世紀の劇的な移民の増加は，工業化と都市化を背景にヨーロッパからはじまった。アメリカ合衆国が最大の移民先となり，オセアニアにも新たな移民の国が成立した。しかし，20 世紀に入ると移民受け入れ国で新移民への反発や差別が顕著になった。

◆左のグラフを参考に，アメリカ合衆国の移民政策について調べてみよう。
◆移民の受け入れにどのような課題や問題がおこってきたのか，調べてみよう。

参考ページ
▶ p.125, 146

❷ ノーベル賞に見る世界史

keyword : 19 世紀後半～　科学／戦争／人権

ノーベル賞のメダル

マザー＝テレサ

自然科学 3 賞	平和賞
レントゲン（1901）	デュナン（1901）
キュリー夫妻（1903）	赤十字国際委員会（1917，44）
コッホ（1905）	オシーツキー（1935）
ラザフォード（1908）	シュヴァイツァー（1952）
マルコーニ（1909）	国連難民高等弁務官事務所（1954，81）
プランク（1918）	キング牧師（1964）
アインシュタイン（1921）	サハロフ（1975）
ハーン（1944）	マザー＝テレサ（1979）
フレミング（1945）	ダライ＝ラマ 14 世（1989）
クリック，ワトソン（1962）	アウン＝サン＝スー＝チー（1991）
タウンズ（1964）	マンデラ，デクラーク（1993）
キルビー（2000）	劉暁波（2010）

自然科学 3 賞（物理学・化学・医学生理学）と平和賞のおもな受賞者（　）内は受賞年。

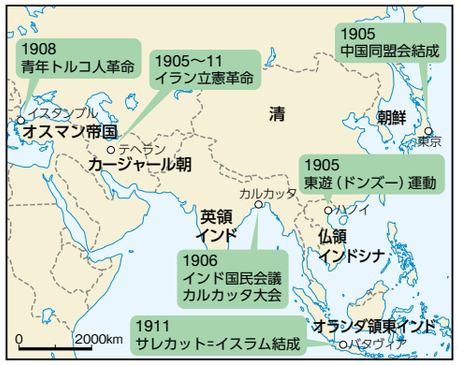
ノーベル賞は，私たちの生活や社会を大きく変えてきた科学技術の発達や戦争・人権問題などの歴史をたどるのに，とてもわかりやすい材料を与えてくれる。

◆ノーベル賞はどのような経緯ではじまったのだろうか。
◆自然科学 3 賞の受賞者から，科学技術の発達と兵器の問題について調べてみよう。
◆平和賞は，平和とは戦争だけでなく人権抑圧などの構造的暴力のない社会だというメッセージを発信している。どんな人がどんな活動で受賞したのか調べてみよう。

参考ページ
▶ p.125, 147, 199, 201 など

❸ 日露戦争とアジア・アフリカの民族運動

keyword : 20 世紀前半　民族／独立運動



20 世紀初頭の民族運動

1905 年，アジアの国である日本が日露戦争で大国ロシアを破ったことは，アジア・アフリカの民族運動を高揚させ，各国の独立運動にきっかけを与えた。

◆地図を参考に，アジアでおこった運動の内容をそれぞれ調べてみよう。
◆ヴェトナムの民族運動家ファン＝ボイ＝チャウの文章を読んで，当時のアジアの人々がどのようなイメージで日本を見ていたのかを考えてみよう。

ファン＝ボイ＝チャウ「海外血書」

「現在我が国の民は，自分のふるさとの外にどのような世界があるのかを知らず，飲食と男女のこと以外にはどのような人生があるのかも知らないといっていいほど，まことに無知そのものです。……私はただ今，東洋の大国日本に来ておりますが，……そこでは我々も差別なく飲食を与えられ，病気であれば手厚い手当を受け，我々の椅子寝台，往来する場所などすべてが清潔に整えられ，身の回りの世話などことごとに仁愛あふれる応待をしてもらえるのです。……フランス人は，これとまったく反対で……ヴェトナム人を獣や雑草といってさげすんでおります。」

（『ヴェトナム亡国史他』東洋文庫 73，平凡社，一部改変）

参考ページ
▶ p.126 ～ 140, 158 ～ 161 など

❹ 世界恐慌から第二次世界大戦へ

keyword : 20 世紀前半　戦争／国際協調

1918	ウィルソンの 14 か条発表
1919	ヴェルサイユ条約締結
1920	国際連盟成立
1921	ワシントン会議（～ 1922）
1924	ドーズ案
1925	ロカルノ条約
1927	ジュネーヴ軍縮会議
1928	不戦条約（ケロッグ・ブリアン協定）
1929	ヤング案
1930	ロンドン軍縮会議
1932	ジュネーヴ軍縮会議

第一次世界大戦後の世界の動き

第一次世界大戦が終了した後，ヴェルサイユ体制やワシントン体制が形成され，世界は平和への道を歩むはずであった。しかし，1929 年の世界恐慌から，世界は一挙に第二次世界大戦に突入していった。戦争の再発を防ぐはずであった人類の英知が，ことごとく無になってしまったのである。

◆年表を参考に，それぞれの条約や組織の内容を調べ，その意味を考えてみよう。
◆ヒトラーの文章を読んで，ヒトラーがなぜ多くのドイツ人をひきつけたのか考えてみよう。

ヒトラー『わが闘争』

「アーリア人種は人類のプロメテウスであってその輝くひたいからは，いかなる時代にもつねに天才の神的なひらめきがとび出し，そしてまた認識として，沈黙する神秘の夜を明るくし，人類をしてこの地上の他の生物の支配者となる道を登らせたところのあの火をつねに新たに燃え立たせたのである。……アーリア人種に，もっとも激しい対照的な立場をとっているのはユダヤ人である。……この世界にユダヤ人しかいなければ，かれらは，憎しみに満ち満ちた闘争の中で，互いにだましあうだろう。」

（角川文庫，一部改変）

参考ページ
▶ p.154 ～ 157, 164 ～ 167 など